

318

492

次の戦争

國際聯盟協會



始



318

492

次の戦争

國際聯盟協會

3/8-492

# 次 戰 之 争

栗 屋 關 一 述

1922

國 際 聯 盟 協 會 發 行

大 正

11 9.16

交 內



THE  
MUSEUM  
OF  
THE  
MUSEUM

THE  
MUSEUM  
OF  
THE  
MUSEUM



## 目次

### 第一 若しまた戦争あらば……

(一)人命財物の損失、(二)新戦闘方法、(三)新式武器、(四)何等の協約も頼むべからず

### 第二 新式武器は如何に使用されたか……

(一)戦闘方法は未開時代に復歸した——獨逸も英國も同罪である、(二)毒瓦斯攻撃、(三)空中襲撃、(四)無用の財物破壊——除外例

### 第三 新式武器の破壊力益々加はる……

(一)生物を斃す毒瓦斯——瓦斯マスク——ルイス瓦斯、(二)飛行機は一箇の巨弾——投下爆弾の命中率、(三)戦場の霸王たる重砲——長距離砲の將來、(四)陸上戦闘艦たるタンク——新改良型——敵國上陸の可能——上陸戦と飛

目次

行機、(五)新殺人器の發明に没頭す——光線および病菌

第四 次の戦争を想像す……………

(一)次の戦争の一特徴——毒瓦斯戦——軍人の意見、(二)どのやうに戦はるか——歩兵の用不用——上陸作戦、(三)毒瓦斯に對する都市防禦法、(四)殺人光線および病菌に對する防禦法、(五)人命の損害、(七)財物の損害

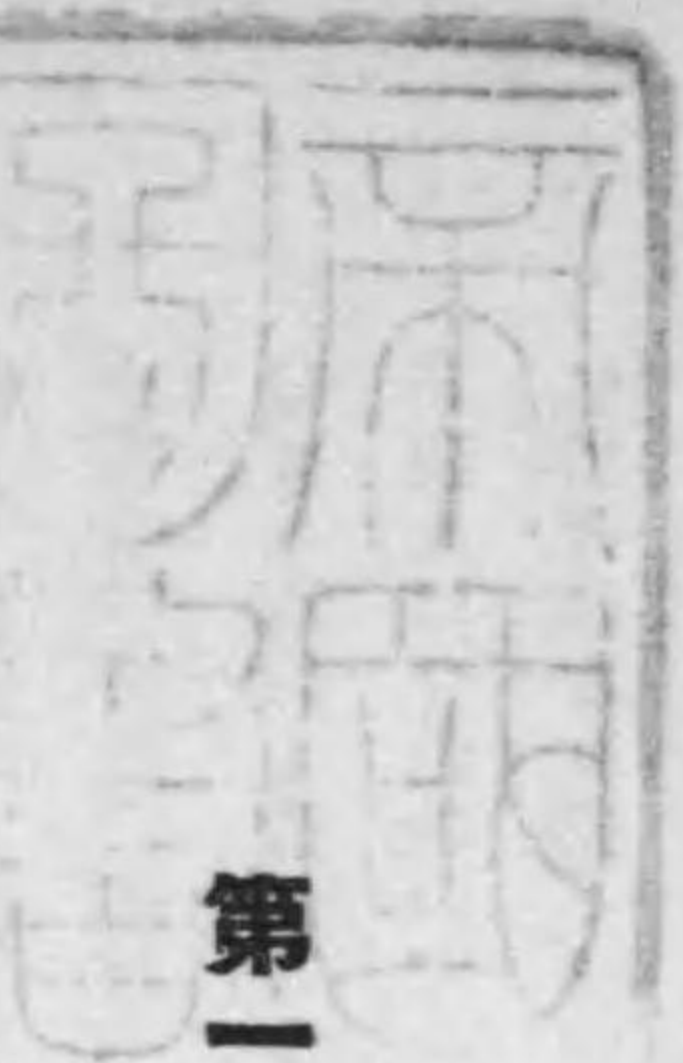
第五 戦争は容易に談すべきで無い……………

(一)人命の損傷を如何に見るべきや——戦争は人間の優種を絶つ——非戦闘員の損失——戦死は純然たる損失——優良女子は殺さる——戦争の災を免るは劣者である、(二)物質上の損失、(三)世界を相手とするを要す——軍備で先づ倒れる——軍國の組織——獨逸は何故に負けたか——實際問題、(四)國際聯盟の努力すべき所——強大國の責務

以上

# 次の戦争

栗屋 關 一 述



## 第一 若しまた戦争あらば

(一)人命財物の損失——(二)新戦闘方法——(三)新式武器

世界は歐洲大戰の慘禍に懲りて戦争を將來に絶滅せんとする要求は到るところに民衆が衷心の叫びこなつた。然るにも拘はらず、世界の一部には亦戦争中の悲傷痛苦を忘れて猜忌復讐の念に燃る、機會あらば再び起つて世界搏噬攘奪の慾を逞しうせんとするあつて、窮苦切迫の中にも軍備を弛ぶるを肯んぜず、虎視眈々内心睡み合ふ險惡の状態は反つて戦前よりも熾烈なりと稱せられ、歐洲の識者中には戦後早くも『第二の世界戦争』の語あつた。たゞ幸ひにして太平洋方面に位する我國は今此等の紛擾より免れ、諸大國と協定を遂げ、海軍の一事に至つては軍備を制限し得ることとなつ

第一 若しまた戦争あらば

た。されば我が陸軍も周囲の情勢と民意の存する所に顧み、成る限りの改革を断行するに躊躇せざること、人は豫期して居る。蓋し今こなつては何處の國にも一意戦争を謳歌するものはない、然かも廣き世界の中に今尙冷然として軍備縮小にも反対するものあるは事實である。或はいふ、戦争は人間の本能である、戦争を世界から絶滅することは絶対不可能であると。或はいふ、國民は生存の権利がある、之を妨げらるれば結局戦争の外はない、人間最後の判決はたゞ戦争のみであると。或は然らざるも軍備を以て自衛手段となすの要あるを説く者はいふ、世界の強大國が國際協戮の通義を無視し、自家の正義と信ずる所を以て世界の正義となし、勝手に弱國を抑え付けんとするに於ては將來戦争の機此に潜む。歐洲の今尙擾々として安定を缺き大小各國が不本意ながらも軍備を弛ぶる能はざる所以も鮮からず此等の事情に原因するに。

我々は今此等の言の理否を論ぜず、若し將來何れかの原因よりして戦争再び起るとすれば、世界は如何になり我々は如何なる覺悟をなさねばならぬか。我々は現實の見地より、將來の戦争其物の如何なるものなるやを察して、世人の常識に訴へ軽々しく戦争を談ずるもの、一考を求めたい。茲には唯將來の戦争が人命及び財物の上に及ぼす効果を考察するに止める。總じて此等の事は今また

我々輩の淺薄なる知識、貧弱なる想像力に待つまでもなく、世間平和人道の進捗に努力する人々及び専門軍人の著書に於て既にこれを説いて餘蘊なく、其の卷冊もまた鮮からぬことであるから、我々はたゞ之を紹介すれば可い。

### 一 人命財物の損失

實は或は此れも既に無益の事かも知れぬ。戦争に就いて如何なる説あるにもせよ、凡て戦争は概ね何時の世にも禍害である。兵は凶器、争ひは末節。師を興すこと十萬、日に千金を費す、大國といへども戦を好めば必ず亡ぶと、支那でも二千年前の昔から相場は極まつて居る。すなはち戦争の人類社會に乃ほす禍害は今更説き立つるまでもない事であるが、所謂將來の戦争に就いては然らず、一應にも二應にも熟考の必要がある。識者は單に此を以て一二大國の滅亡と見ず、世界人類の皆滅と見て居るからである。

今將來戦争起る場合、人命殊に非戦闘員及び財物の上に如何やうの効果を及ぼすかを知らずには歐洲大戦争のこの點に及ぼした効果を回顧すれば、其の一斑を想像することが出来る。

歐洲大戰に於て財物に關する點は姑く措き、戦死者の數は一千萬といはれ、又此外に間接に戦争のために斃れたものが三千萬あると云はれて居る。此の三千萬は老幼虚弱者等の所謂非戦闘員であつて、戦争の餘弊饑寒疾疫等のために斃れたものである。即ち戦争さへ無くれば今日までも壽を保つて生を樂み得る人々なのである。我々はこれを見れば如何に驚かすべきか。戦争は軍隊として一國の優良分子を失ふことは最も痛むべき事であるが、新式戦争は獨り軍隊のみでなく、非戦闘員の犠牲をも此の如く要求するのである。

## 二 新戦闘方法

新式戦争がかゝる慘澹たる無前の結果を來したのは種々の原因もあるであらうが、其の主たるものは第一に武器が益々精銳となり、第二に現代戦争に對する考へが一變し、随つて攻撃の犠牲が増大したる事である。

新式戦争は速戦速決を尊ぶ、若し此の機會を逸して戦争が長期に亘るに於ては、人命の損害莫大なるのみならず、軍需品及び金錢の消耗無限にして人民先づ困窮し、勝敗は究竟國力の大小如何に依て

分れんとするに至る。此に由て新式戦争はその手段を擇ばず、一方には戦場に一時に衆多の軍隊を出して如何なる方法を以てしても勝ち、一方には有形、無形に敵の致命部を攻撃し、戦争の中樞を撃破し、人民の戦志を喪失せしめんと期するのである。食料封鎖を行ひ空中攻撃を加へ、敵の中央政府、重要都市、軍需工場、海軍根據地、重要港灣を襲撃するのは皆之が爲めである。即ち戦争の論理は極端にまで押進められて、國際協約や戦争法規は全く蹂躪されたのである。委しくいへば從來戦争の悲痛残酷を成るべく減少し、敵に對しても無用の苦痛を與へざらんため、武装平和時代中に武士道的戦闘方法を色々と國際間に約束した事は皆歐洲戦争で無視されたのである。勿論戦争は潢池に兵を弄する兒戯ではない。我が意思を敵に強制し屈服せしめるのが其の目的であつて、事は一國の生存興廢の岐る、所であれば、其の手段を擇ばざるに至つたのも一應尤もとも見ゆる。

軍隊及び非戦闘員の斃るるもの前古未會有なりしも皆此處から來る。例へば後者よりいへば女子の如きは從來非戦闘員として待遇せられ、敵の攻撃の標的となるやうな事は無かつたのであるが、今や新式戦争は軍需其他軍國の勤務に人力を要すること莫大となつて、歐洲戦争では兩交戦國は大抵孰れも男子の三分の一を軍隊に徴集し、爾餘三分の二の中で老人小兒を虚弱にして勞働に堪へざ



るものを除くの外は皆軍需工場等に使用したのであるけれども、其れでも尙引足らぬところから、女子を採用した。女子の採用は歐洲戦争の一特徴であつて英帝國のみでも五百萬人が此等の男子と同じく軍需其他の工場で雇用された。此の結果工場が敵の襲撃を受くるに及んでは女子は戦場に在る男子と同様に爆弾の犠牲となるやうになつた。

### 三 新式武器

殊に最も關係あるは新式武器の破壊力の増大である。武器は戦前より近代科學の力を應用して精巧猛悪なるものが多く發明され、同じ戦争中にも絶えず新しいもの又は改良したものが發明使用された。人間の福祉利便を進むるを目的とした科學の力を殺傷破壊の道具を造り出すことに向けられたといふことも歐洲戦争の一大特徴であると云はれて居る。

新式武器中で殊に關係あるものは、第一は爆弾投下用としての飛行機である。第二は毒瓦斯である。第三はタンク(装甲自動車)である。次に重砲をも之に加へねばならぬ。又海戦では潜水艦を擧げねばならぬ。此等はいづれも戦争の始めと終りまでは非常の進歩改良をなし、就中飛行機は戦争

の終り頃には聯合軍側には一千封度の爆弾を之に搭載して伯林を攻撃せんとする準備が出来て居た。毒瓦斯は都市攻撃に使用されず、随つて非戦闘員に直接の影響はなかつたけれど、其の性質は益々猛烈となり、休戦少し前米國人の發明したもの(ルイス瓦斯)は少しでも人の皮膚に觸るれば忽ち其の人を斃すほどの恐るべき物であつて、此れ亦聯合軍側では之を大きな毒瓦斯彈に造つて伯林の全市民を襲殺せんとすとの説もあつた。此の毒瓦斯の研究は其後各國も益々進めて居る。

此外に人を殺す道具として未だ實戦には使用さるゝに至らなかつたけれども密々研究され、戦後また引續き研究を進めつゝ、あるものが鮮くない。例へば病菌、光線等であるが、此等は將來戦争あるまでには必ず立派に完成されて、前記の毒瓦斯等と共に盛んに使用さるゝに至るに違ひないと云はれて居る。

以上、此等の新式武器と新式戦闘方法を併せ考へれば、歐洲戦争に於ける人命財物の損失破壊の如何に恐るべきものありしかの理由も理解され、又將來戦争起る場合に此等の新式武器の益々改良されたものが遠慮會釋なく非人道的に使用さるゝことあるに於ては、其の結果の慄然として恐るべきも容易に想像され、實に世界人類の破壊といふも偶然でない。

## 四 何等の協約も頼むべからず

人或は云はん、將來戦争起るとも必ずしも此の如く慘忍ならず。無防禦の都市を攻撃し、非戦闘員を亂殺するは人心あるものの忍ぶ能はざるところである。獨逸が敗衄したのも斯る非人道的な遣り口が第一次の原因をなす。國際聯盟及び華盛頓會議は國際公法の尊重に注意して居ると。此の如くならば誠に仕合せである。然かも戦争は人理に外れた非常事である。一たび戦争とならば何人が何時如何なる行動に出でぬとも限らぬ。歐洲大戰に米國軍參謀長であり、巴里平和會議に米國委員であつたブリス少將は華盛頓會議前に某市の公開席上に演説して此の事に論及して曰く、「人或はいふ將來戦争の場合には、戦争をして斯くまで悲惨ならしめた一切の武器を禁止すれば可いでは無いかと。どうして禁止するか。海牙の平和會議は毒瓦斯の使用、潜水艦の無慈悲なる行使、空中からの爆撃、残忍なる食料封鎖を禁じて居た。然かも此等一切の制限は最近の戦争に於て敵も味方も共に悉くこれを破毀したては無いか」と。専門家の意見は皆之と一致して居る。

將來再び戦争起るか否かは知らない——我々はこれなきやう熱誠を以て十分に努力せねばならぬ

ぬのであるが、萬一にも之あるものとすれば、其の如何なる戦闘方法を以て行はるべきかに至つては論者は今疑はぬのである。此の方法は必ず歐洲戦争の未だ見ざる所を行き、毒瓦斯、飛行機、タンク等を以て都市を攻撃し、非戦闘員を殺戮し、戦争が世界に亘つて人命財物に及ぼす惨害は能く言語の盡す所にあらず、結局世界人類の破滅となると皆云つて居る。次に少しく詳かに之を説く。

以下三章は例の如く主として米國のウイル・アーウインの著『次の戦争』(『The Next War』)の中から抜集め、之に他の諸書を参考として試みに陳述したものである。アーウインは新聞通信員として歐洲大戰に従軍し、痛切に戦争の悲惨且無意義を感じ、歸つて此の書を著し、將來の戦争の恐るべきを通俗的に説明し、夫のフリッツ・ギブスの『今では言うて宜し』(『Now, It can Be Told』)及びバルビユツスの『砲火の前に立つて』(英譯 Under Fire)と共に有名となり、米國の平和運動に従事するものは皆此の書を勧め華盛頓會議を開く輿論を形成するに至らしめたのも此の書の如き大いに力あつたミ稱せられた。今専ら陸戦に就いてのみ記す。海軍に就ては本編の目的よりいふならば唯だ潜水艦の非人道的使用に關するもののみであるが、潜水艦の事は曩に本協會より刊行した『將來の海軍』で略ほ明かであると思ふから茲には省略した。尙アーウインの書にはタン

ク最近の發達に係るものは之を載するに至らず、専ら英國フーラー大佐の倫敦「第十九世紀」(千九百二十一年十月)に掲載した論文中より取つて加へた。

## 第二 新式武器は如何に使用されたか

(一)戦闘方法は未開時代に復歸した—獨逸も英國も同盟である(二)毒瓦斯攻撃(三)空中襲撃(四)無用の財物破壊—除外例

### 一 戦闘方法は未開時代に復歸した

先づ歐洲戦争に於て新式武器が如何に使用されたかを一通り述べて見る。

アウインは歐洲戦争を以て文明の逆轉であるといふ。人間が合理的な考へをなすやうになつてから漸次養成し來つた軍事上の道德は歐洲戦争に依て蹂躪され、戦闘方法は上古未開時代の状態に復歸した、而して其の武器は精巧を極むるだけに其の結果は慘酷を極めた。

西洋の歴史で見ると、未開時代の戦争は多く敵を斃すを誇りとして、降服して來たものも己れの

氣に喰はぬ時にはこれを斃殺し、時には又その女子供をも殺して顧みなかつた。希臘隆盛の時代から戦争の其の野蠻的な方法を非難する説も出て來て、例へば女子供を殺すとか、降服人を殺すとかするの人間たるもの、道に背くといふやうな考へになつて漠然ながら一種戦争の規則や慣例も出來た。無論當時は未だかゝる罪惡が跡を絶つといふには至らなかつたけれど、其れでも斯る場合には心中疚しきものあるやうに何か言ひわけがましい説をなして世間體を繕はんとしたのである。紀元前五十年頃、シーザーが獨逸に攻入つて盛んに土民を亂殺したとき、羅馬の元老院ではそれを問題として大攻撃を加へ、カトーはシーザーを引縛つて獨逸人に引渡せよまで息まいた。

耶蘇教が歐洲に入つて社會人事の指導となるに及んで戦争を惡事とする倫理運動も亦起り、不義無名の戦争は罪惡であるといふ原則だけは確實に設定され、無用の殺傷兇行を抑制し、武士道的な戦闘方法を樹立して後世の大法とせんとする努力は確かに見えて居た。神の休戦といふ語が出來て、一週の中一日だけは伏屍流血の慘事を休めんとしたといふ事も正しく此の非戦運動の一端として見るべきである。

然るに第十六世紀に入つて宗教戦争屢々起つて此からの運動は一時頓挫した。當時の考へでは異

端異教は神に對し人に對する最大罪惡であるから、異教徒に對しては肉を割き骨を碎き、どんな慘酷な責罰を加へても飽足らぬといふのであつた。獨逸に於ける三十年戦争の虐殺、和蘭アントワープの剽掠の如きも斯る考へから起たのであるが、後段々と此の迷ひから目覺めて、また武士道的な倫理運動が起るやうになり、現世紀に入つては交戦法規も出來て、軍人の教育にも之を教科書に記載して凶惡殘忍を戒め、最後に海牙平和會議ではこれを承認して國際公法とした。

此の戦争法規は女子供の如き非戦闘員をば成る限り保護し、又敵の軍隊も降服して來たものは故なく之を殺さずといふことを大本の原則として、更に細目を定め、都市を攻撃包圍する場合には相當の猶豫期間を與へて非戦闘員を立ち退かせ、戦勝者が敵の領土を占領する場合には住民の生命財産を重んじ、俘虜にも相當の食料住居を給し、衛生員には戦傷者を收容救護するの機會を與へ、爆裂彈、毒瓦斯等、無用の苦痛を與へる野蠻的な兵器は之を禁制する事とし、海戦にも之を應用して中立國の船舶を謂れなく撃沈せず、教法、醫務、博愛の任務に服事するものをば尊重することに申合せた。各國軍人も一般に此の法規を以て軍人の聖典となし、青年將校には此の旨を教訓し、戦に臨み敵に對しては勇敢なるも殘忍ならざるを軍人の榮譽體面とする等、嚴肅壯美なる軍事道德の觀

念を注入することに勉めた。然るに千九百十四年八月大戦争勃發するに及んで此の戦争に對する態度は俄に一變したのである。

### 獨逸も英國も同罪である

歐洲大戦争は四十年來、兩交戦國が軍備を重ね睨み合つた末に破裂したのである。されば開戦の曉は兩交戦國は俱に之を以て生死存亡の岐るところとし、全國民の力、一切の資源を傾倒して戦ひ、戦争が有史以來未曾有の慘酷性、破壊性を現出せんとは、戦争前より識者の早く知つて且警告したところであつたが、戦争は果して其の言の如く、戦闘は初めから悲惨殘酷を極めた。兩交戦國は新式武器を利用し、一意敵を撃倒せんとし戦争法規や慣例を全然無視してかかつた。たゞ双方とも戦争法規の文面だけは尊重して犯さざりしとも云へば云へ、其の精神は初めより全く無視されたのであつて、戦争の進むに従つては恥づる所なく名實共に棄て、顧みざるやうになつた。

アーウィンはこの罪に於ては兩交戦國も共に同罪である云つて居る。英國は開戦と同時に其の大優勢の海軍を以て獨逸を封鎖した。海牙條約に都市を包圍する場合は非戦闘員をして艱苦、飢

餓、砲撃の苦痛より免れしむるため退去の機会を與へるといふ規定の精神はこれに由て全く破られたのである。英國が獨逸を封鎖した所以は獨逸を食糧攻めにせんが爲めであつた。獨逸は平生食料の僅か八割だけを生産するに止つて其餘はみな外國から買入れて居つた。さうして此の八割も集約的耕作法に依て勉強して耕作するでなければ得られぬのみならず、國人のみでは手不足のため播種收穫の旺季には毎年露國から勞働者一百五十萬人を雇入れねばならなかつた。此の勞働者は今露國から輸入することが出来ない。英國は此の灸處を知つて居るから、食料輸入の道を絶ち獨逸國民を兵糧攻めにせんとしたのである。然るに英國も食糧及び工業原料を外國に仰がねばならぬところから、獨逸も同一の方針を取り、開戦の初めから著々其の計畫を立て、準備成るを待つて潜水艦を放つて英國及び中立國の商艦を攻撃した。獨逸が此の攻撃を行ふに當つては、海戦法規を破つて停船を命ずるのでなく、臨檢捜査を行ふのでなく、船員に退去の機会を與ふるのではなく、見當り次第にどしどしと撃沈した。此れが爲めに米國から苦情が出たので、獨逸は米國を戦争に引入れんことを恐れて千九百十五年一時此の攻撃を中止したが、後千九百十七年また無警告撃沈を行うに及んで、米國は遂に参戦した。

此の戦争に飛行機が始めて用ひられた。戦争法規に據れば砲撃を行ふ場合には普通人民に對して警告を與へることになつて居るが、飛行機の成功は襲撃の神速を要するのみでなく、敵の不意を襲撃せねばならぬ。開戦から十五日目に獨逸は突如タウベ號を巴里に送つて爆彈を投下した。爆彈は一商店の店先に破裂して其處に肉を切つて居た市民二名が之に撃たれて斃れた。獨逸は又白耳義に侵入するやその沿道の各都市の有力者を捕へて人質とした。而うしてどの都市でも獨逸の命令に背いて反抗的行動に出づるものあれば理不盡にも其の人質を打殺した。人質といふことは久しい前から廢止されて居て前世紀の半ばころに出來た本にも此れを以て野蠻未開時代の陋習として今行はれずとしてあつたほどのものであつて、今日では人も皆殆んど忘れて居たのである。かやうにして三百年このかた、よしや外觀にもせよ漸次築き上げられて來た武士道的な戦争法規は著々破壊されるやうになつた。

## 二 毒瓦斯攻撃

然かしながら此等はまだまだ本の初歩であつた。戦局が進むに従つて戦争法規は益々無視され、

戦闘は愈々慘酷性を帯ぶるに至つた。初め獨逸の作戰計畫では一舉に佛國を屠つて早く戦争を片附ける積りであつたのであるが、マルヌの失敗に依て事は志と違ひ、戦争は長期戦とならざるを得ざるに至つた。此に由て獨逸は第二年目から其の作戰計畫を改めて持久の計を樹て、陸に海に有りとも有らゆる手段を取て敵を倒すの策を定めた。此の結果新たに採用されたのが千九百十五年四月二十二日の毒瓦斯攻撃であつた。

是の日獨逸は西部戦線に虹色の毒瓦斯を放つた。濛々たる毒煙は聯合軍側に吹寄せ、これを吸ふものは忽ち肺に腐蝕炎衝を起し咳嗽を發し治療の効なく、矢庭に死すもの何千人といふ數に上つた。當時聯合軍には斯る毒瓦斯の準備は少しもなかつた。若し聯合軍が此の毒瓦斯に對抗する方法を講じなかつたならば、此の毒瓦斯のみで早く戦争に負けたであらう云はる。

毒瓦斯攻撃といふことは固より以前から知られて居た事ではあるけれど、軍人も流石に恐れてこれをを使用することを躊躇したのみならず、多くは又かゝる卑劣な戦闘法を排斥し、第二回海牙平和會議では各國とも此が使用を禁止することを申合せて條約に規定して居たのである。獨逸人は謂へらく戦争は一國の生死存亡の岐る、所である。何等の手段方法も回避するに及ばず、要は敵を撃倒

するに在るのみと。

斯くして此の日（千九百十五年四月二十二日）より後、文明的戦争法規は一層の決意を以て破壊され、戦闘方法は未開時代の状態に押戻るさ、と同時に、兩交戦國は科學者を徵集して科學上の研究發明の結果を應用して殺傷破壊の器械の改造創造に全力を傾注した。アーヴィンは云ふ人間の想像力が殺人器械の上に向けられ、各國大小の科學者が競うて殺人器械の工夫製作に没頭したといふことは、實に此の大戦争中の首要な社會的現象であると。多くの人が此の日を以て歴史上永久に記憶すべき日となすのも尤もである。

然かしながら毒瓦斯は戦争中を通じて未だ以て非戦闘員を攻撃するに至らなかつた。此れは其の事の餘りに慘酷なりといふが爲めであつた。但し兩交戦國とも戦争の終り頃には内々これが準備をなして居たことは事實である。若し戦争が長引いたならば兩交戦國とも毒瓦斯弾を用ひて都市を襲撃して全市の老若男女は皆殺しに遭つたであらう。

### 三 空中襲撃

第二 新式武器は如何に使用されたか

軍事上の必要は同時に更に無防禦の都市及び工場の攻撃に向はしめた。是れより先き獨逸は戦線後の附近都市に向つて空中襲撃を試みたけれども、此れは深き意味あるのではなく、單に一種の對敵宣傳に出たのであつた。獨逸は聯合國側の民心を感亂し士氣を沮喪せしむる目的を以て、理窟にも感何に合はぬ愚劣な文句を刷物にし、その何百噸といふものを戦線や戦線附近の都市村落に撒き散したのである。「獨逸の參謀本部は作戦計畫には巧みであり、科學上の知識にも長じて居たけれども、人間の心理を理解する力にかけては憐れなほどに貧弱であつた。」彼はかゝる宣傳法に依て英佛兩國人の心を動かし、恐怖状態を起して其の戦志を挫き國內に平和の叫びを舉げしめんと擬したのであるが、此の淺薄なる手段は見事に失敗して反つて自滅を早むる原因となつた。即ち敵に恐怖心を起さしめずして、反つてその敵懐心、反撥心を刺戟し、一層その抵抗力を増さしめたのである。然かしながら後には双方とも眞劍に空中攻撃を行ひ、而うして相當に効果を擧げた。

新式戦争は軍需品を要すること莫大である。随つて軍需工場其他軍國の機關を破壊し、或はその動作を妨碍するは戦場に軍隊を斃すと等しく勝利を得るの手段である。獨逸は此の戦争をなすに國內一切の資源、殊に生産機關を動員して至大の準備をしてかかつた。「敏感なる佛蘭西人は直ちに此

の戦争は國民の全員を要すると共に産業上の全力を盡さねばならぬと悟つた。鈍感なる英國人は遙かに後れて氣がついた。」かくして兩交戦國は前後の差こそあれ、國內一切の資源を傾倒し、軍需、農耕、其他戦争關係の事業に着手したのであるが、男子は重に戦場に派遣されて、男子の手が引足らぬところから女子を採用した。その女子のみも莫大な人數となり初めは僅かに、何千、何萬といふに過ぎなかつたが、後には何百萬といふ大數に上り、英帝國のみでも三百萬を下らなかつた。此外に篤志婦人として軍國の勤務に就いたものも何百萬に上つた。此に由て若し一方の國で女子が軍事上の職務に服することを承知しなかつたならば、その國は戦争に負けるといふ語も早く出來たほどであつた。

此の結果女子も敵の攻撃の目標となるやうになつた。倫敦郊外の工場では砲銃彈、火藥、其他の兵器を盛んに製造して數多の男女職工を使役し、戦争の仕舞ひころには男女ほゞ同數の人數であつたが、獨逸のツェペリンは屢々此の工場を襲撃した。舊戦法規に非戦闘員殊に女子を殺傷することを禁じて居たのは、女子は生かし置いても大局の勝敗に影響ないからであつたが、新式戦争では女子を斃すは即ち戦勝に必要な手段となり、戦場に數箇師團の兵を殲滅すると同様の効果を收め得

るのである

防備ある又は防備なき都市、港灣、村邑を攻撃することも工場を攻撃すると同様の効果がある。其手初めは獨逸であるが、去りとて此を以て獨逸を責むる譯にはゆかぬ。其の故は「唯だ獨逸が初めから此の攻撃を決行し得る地位を占めて居たからの事であつて、若し聯合軍でもその初めから獨逸人の地位に在つたなら必ず此の攻撃に出でたに違ひない。獨逸は機先を制して深く敵地に侵入したので巴里を距るこゝ僅かに七十哩、倫敦を距ること僅かに一百哩の處にまで前進して居たのであるが、聯合軍はこれに反して進んで伯林を襲撃するには約四百哩の空中を飛翔してゆかねばならなかつたのである。

一國の重要都市、殊に首府を攻撃する軍事上の効力は疑ひのないところである。凡そ戦争に於て作戦の中樞たる處は主として一國の首府である。獨逸が巴里に對して空中攻撃を加へ、また長距離砲を放つたといふことは故あることである。獨逸が若しも此に由て巴里に大打撃を與へることが出来たならば、制勝の大機會を収め得たに違ひない。國內の鐵道は皆巴里を中心として四方に通じ、戦線に在る軍隊への彈藥糧食の供給等はみな此の鐵道に依るのであり、又戦争の遂行に必要な凡百の

官衙もみな巴里にあつたのである。若し空中攻撃に依て鐵道聯絡を絶ち中央政府及び諸官衙を爆破するこゝが出来たなら、建物や其の必要な帳簿文書等は焼失し、職員は離散し、戦線の軍隊は補給を断たれ、寡くとも一時は敵をして大混亂に陥らしめ得たであらう。

かくして都市、工場の空中襲撃が其の功を奏すれば奏するほど、有形、無形に一時大混亂を起させるだけの効能は確かに在る。獨逸の倫敦及び巴里に對する空中襲撃が決して無効でなく、巴里に對する長距離砲も相當の結果を挙げたことは、今日となつては英國人も佛國人もみな認めて居るところである。現にウーリッチ工場でも屢々獨逸から襲撃された際は、人心恟々として仕事に附かず、軍需品の生産高は平日の四分の一に減じて、忌々しき結果を來さんとしたとは英國人も今日では自白して居るところである。

此れのみならず、空中襲撃を防禦するといふことは困難な事であつて、これを防禦するに高射砲もあるけれども、効力乏しく、畢竟飛行機を防ぐには飛行機を以てするの外はないのである。そこで佛國人は巴里が襲撃を受くる際には、防禦のため戦線の兵力を割き、數十臺の飛行機と多數の高角砲とを引揚げざるを得なかつた。然るに獨逸が巴里襲撃に飛行機幾臺を用ひたかといふに、何程



でもない、一時に十二臺以上を出したことは無かつたのである。後には聯合軍側でも盛んに飛行機を製造して、一千九百十七年及び千九百十八年には遠く獨逸の諸都市を攻撃して諸處の軍需品工場を爆破させた。獨逸人は此に於て急に大恐慌を起し、矢張り戦線から飛行機を引揚げて自ら備へざるを得なかつたが、此間諸工場に雇はれて居た外國労働者などは皆恐れて逃げ出し、軍需品の生産額は同く大いに減少した。聯合國側では其後益々堅固な飛行機を造り出し、千九百十九年には空前の大規模を以て堂々と伯林を攻撃し、全市を焼き立て住民を變しにする計畫を立て、居たが、其の前急に休戦となつたので沙汰止みとなつた。聯合軍側の此の計畫も決して是まで已等の都會に荒された一場の復讐心に出でたものではなく、みな軍事上敵を屈服せしむる目的に出でたのである。軍司令部の求むる所は事の結果であつて、私の怨みを晴すためではなかつた。軍人は大都市を襲撃すれば軍事上何程の効果あるかを知つて居た。加之軍隊の存在する理由も一國の防禦であることを知つて居た。之を要するに凡て戦争は軍隊を殲滅するのみが目的ではなく、國民を屈服して我が意思に服従せしむるが目的なのである。大都會を攻撃することは稍々盲目的な攻撃法ではあるけれど、此れにして成功すれば直接に敵の抵抗力の中樞を打破するものなることは疑ひないところである。

飛行機が敵の不意を衝いてその都邑を攻撃することが出来れば、其の内に在る一切の生物がみな破壊圏内に入ることは勿論である。此の攻撃に對しては屈竟な兵士もない、か弱い女子供もない、戦闘員もなければ非戦闘員もない、所謂一蓮托生である。巴里が二十分毎に天上から一大爆弾を見舞はるれば、その落下する前後左右にある男女老若はアツといふ暇もなく、粉微塵になつて吹飛ばされる、倫敦が攻撃を受くる際、住民は家を擧つて薄暗い地下の避難所に寄集し、母は嬰兒をかばう心に爆裂の音と共に知らず識らず其の子の顔に袖を掩ふなどの痛ましい説は、戦争當時は士氣を挫かんことを恐れて秘し隠しに隠してあつたが、今日では人の語りて恐ろしき物の例に引く所である。英國人や佛國人等の書いた物にも此等の有様が眼に見るやうに細かに描いてある。倫敦人はツエペリンを『嬰兒殺』と呼んで居たが如何にも嬰兒殺しである。然かしながら其れも今日の戦争では已むを得ないのである。嬰兒も軍事上殺さるゝものの數に入つたのである。それを無慙といへば戦争することが悪いといふ外はない。

#### 四 無用の財物破壊

更に財物の上に及ぼす破壊の程度を察するに、是までの戦争では敵の財産に對しても人命に對すると同様に、敵の抵抗力を殺ぐ効果あるものに止めて、無用の破壊をなさざるやう互ひに戒めて居た。然るに歐洲戦争では敵の復讐の機会を絶ち、永遠に己れに屈服せしめんとする政策からして、直接作戦に影響なきものまでも破壊して顧みなかつた。米國の南北戦争でシャーマンが南方に向つての進軍中、暴威暴力を揮ひ直接戦争に用なき財産をまで無暗に破壊したと云つて、南部の人民は非常にこれを怨み今日に至るまでも忘るゝことが出来ぬとの事であるが、然かしシャーマンも直接軍事上に關係なきものをも破壊したのでない。彼の目的は南軍の軍隊給養の道を絶つに在つたのであつて、亦それだけの効を擧げた。今般の歐洲戦争では財物の破壊は更に數歩を進めた。此の俑を作つたものは獨逸である。獨逸は開戦の初め深く敵地に侵入して北佛蘭西の炭坑を確實に占領した。佛國に産する石炭の半分は此處から出るといふ處から獨逸人は故らに炭坑に浸水させて其れを破壊した。佛國人をして此の石炭を用ひしめぬと云ふなら、唯だ之を占領して置けば可い。決してこれに破壊するに及ばぬのであるが、獨逸は永久に佛國を痛めつけ、寡くとも工業上には佛國を獨逸の屬國として永年頭の擡らぬやうにする積りであつたから、かく其の炭坑を破壊したのである。然か

し聯合國とても如何ん。アールヴィンはいふ、千九百十八年獨逸の敗戦は突如として意外に出で、聯合軍はまだ一步も獨逸の領土内に踏入つて居なかつた。若し早く戦争中に獨逸の内地に侵入して居たならば、矢張り獨逸と同様の行動に出でなかつたであらうか、寡くとも此れは疑問であると。

之を要するに、中古以來の武士道的戦闘法は此の戦争に依て破られて、戦争は昔の未開時代の有様に立返つたのである。「紀元千二百年前の未開人は己れの想像力の馳するままに如何なる方法をも憚らず敵を殺した。今日第二十世紀の文明人も左様である。又紀元前十二世紀の未開人は部族の利益となると思へば敵の罪なき婦人兒童をも殺して顧みなかつたが、第二十世紀の文明人も左様である。紀元前第十二世紀の未開人は征服した敵國の人民を奴隸としてこきつかひ、或はそれを脅迫して貢納金を支拂はしめたが、第二十世紀の文明人も殆どそれを選ぶ所はない。佛國炭坑の破壊は其の多き中の一例である。」

## 除外例

但し斯る無法中にも此の戦争を通じて終始戦争法規中の重要なる事頂の遵守されたものが二ある

ミアウインは云つて居る。第一は敵味方とも概して俘虜を寛待し、抵抗力盡きて投降したものは赦して生命を保護したといふ事である。然かしながら若しも戦争が尙長く續いたならどうあつたか此れも疑問である。「獨逸は佛國人、英國人、白耳義人、伊國人、露國人の兵士數百萬を俘虜とした。俘虜の數が此上にも殖えて來たら、それを給養するために、獨逸人はそれだけ益々食料に困むこととなる。假に獨逸は昔の戦争にも見ゆるやうに、その都市を十重二十重に包圍されても屈服するを肯んぜず、最後の一人となるまでも死守するものとなせば、國內糧食先づ盡き、人民は途上に餓死するに至るべく、此の場合彼は俘虜を如何に處分したであらうか。獨逸は俘虜を釋放して本國に送還し、敵の兵力を増加せしむるやうな方法に出でざるべきは言ふまでも無い。又これを近隣の中立國に追立てんごするも其れも出來まい。瑞西や和蘭は左なきだに食料に窮乏して居たのであるから其の俘虜を收容する力あるなく、必ずや苦情を唱へて獨逸に反抗し、結局聯合國に與みして獨逸と戦ふに至つたに違ひない。然らば其時獨逸は俘虜を如何に處分したであらうか。」

其の第二は時々例外もあつたけれど、兩交戦國とも「戦傷者の權利」を尊重した事である。大體より云へば兩交戦國とも救護其他博愛の任務にあるものを愛護して攻撃しなかつたといふ。

以上いふ所を綜ぶるに、「先般の戦争に於て數百年來漸次築ぎ上げられて居た戦争法規は破られて、而うして之と共に未開人に知られなんだ一種奇怪の新要素が加はつたのである、即ち今日まで人類社會の改良を致すことに用ひられた科學的思惟の結果が人類社會の破壊に向けられて、恐ろしき色々の武器が出て來、又來らんとするのである。武器今後の進歩は如何ん。關係は最も此にある、人類重ねて相戦はゞ其の結果は思ひやるだに慄然たらざるを得ぬのである。」

### 第三 新式武器の破壊力益々加はる

- (一) 生物を斃す毒瓦斯— 斯マスク— ルイス瓦斯、(二) 飛行機は一箇の巨彈
- 投下彈の命中率、(三) 戦場の霸王たる重砲— 長距離砲の將來、(四) 陸上
- 戦艦たるタンク— 新改良型— 水上タンク— 敵國上陸の可能— 上陸戦と飛行
- 機、(五) 新殺人器の發明に没頭す— 光線及び病菌

進んで將來戦争の場合に於ける新戦術に就て考察を下すには、先づ前記の新式武器が歐洲戦争に於て如何なる効果を示したかを尙深く審かにし、又それが戦後如何に改良されたか、又今後如何な

る武器が發明使用さるべきかを知らねばならぬ。

軍事上一紀元を劃したものと云はる、イーブルの第二次會戰の後、兩交戰國は國內大小の科學者技術家を動員して各兵器の改良及び新しい兵器の製造に従事せしめたが、其の造り出された中で將來最も關係あり、且最も重きをなすものは矢張り毒瓦斯が一番であらうと云はる。

### 一 生物を斃す毒瓦斯

獨逸が千九百十五年始めて戰線に使用した毒瓦斯はドリフト瓦斯と稱する種類の物であつて、人を殺す道具としてはまだノノ幼稚なものであつた。敵は初めの間はこれを雲煙の如く立て、敵の陣地を襲撃したのである。瓦斯は鋼製のシリンダーに容れて高壓を加へると液體となるから、敵は此の液體をつめたシリンダーを聯合軍塹壕の前面に沿うて數尺置きに地上に挟み、その口を上の方に向けて放つて置いた。すると此れが發散して瓦斯となり、一團の雲煙を作して地上に密着しつゝ、風に誘はれて聯合軍の方に吹きつけ壕壘内に侵入した。此れは風向き一つで敵を攻撃し得るのであるから、急に風向きが變つて味方に吹きつけるやうになると味方が自ら傷くるやうになる。敵は後に

なつては此の用法を變じ、此の毒瓦斯液を彈丸の中につめ、大砲又は臼砲に裝填して發射したり、或は手擲彈に造つて使用した。彈丸を以てすれば矢張り他の砲彈と同様な精度を以て發射することが出るのであるから、後には威力攻撃を加ふる場合には先づ此の毒瓦斯彈を發射し、又他の砲撃中にも之れを交へ用ひて打出した。瓦斯彈が破裂すれば、其の中の瓦斯は四方に飛散し地上に沈下して如何なる處にも浸透するのであるから、塹壕の下にある歩兵も蔽障の底にある砲手も此れに顔面を侵さるれば即死せざるまでも身體精神に異狀を起して陣地を奪取さるるやうになつた。

**瓦斯マスクの使用** 無論毒瓦斯の防禦法も工夫された。何分にも獨逸が毒瓦斯を使用した初めは聯合軍側に於ては思ひ設けぬ事として、防禦具などの用意としては無かつた。敵が毒瓦斯を用ひさうださういふ諜報は薄々聞えて居たけれども、國際協約も之ある事として、獨逸とても眞逆か之れを使用するやうな事あらんとは豫期せないのである。聯合軍は早速應急的にマスクを造つて軍隊に用ひさせ、夫れから後また新しい毒瓦斯の使用さるゝと共にマスクの製法を改良したが、最初に造つたマスクは口を掩ふだけの粗末なもので紗のやうな布片を消毒液で浸して置いてそれを以て造つたものである。當時英國では婦人の手で盛んにこれを製造して戰線に送りつけた。戦争の仕舞頃に米

國軍隊の使用して居た標準マスクはそれから見れば餘程細工の込入つたもので、顔一面をびつたりと掩ひ隠して少しも氣の通はぬやうにして、而うして其の中には當時獨逸軍の使用して居た一切の毒瓦斯を打消す力ある強い薬品を詰めてあつた。然かし此れも護身用としてはまだ不完全であつた。其れといふものは第一に、之れを箝めると氣が詰つて心持が悪くなるので、兵士は兎角これを嫌がり危険な場合に臨んでも餘程厳しく命令せねば箝めんとしなかつた。随つて何時も毒瓦斯攻撃のために大損傷を受けたのはマスクを外して居た時である。兎に角マスクも相當防禦の効力ある事だけは疑ひなかつた。

戦争中使用された毒瓦斯はこれを吸入すれば即死すといふやうなものでは無かつたといふ。一寸其の氣に觸れたばかりでは毒瓦斯たることを感じない。數時間たつてから始めて其の効驗が見える。その効驗の急に現はれず、チリ／＼と現はれるだけに其の使用は一層残酷であつた。

其れと同じやうに毒瓦斯は敵がこれを放つ初めは一寸分らぬから油斷もしやすかつた。カナリヤと白鼠とは毒瓦斯に敏感なといふので、聯合軍側では塹壕内にこれを飼つて置いて毒瓦斯に備へた。此の二動物は不思議にも毒瓦斯を嗅ぎつけて、人間が此れを感じぬ先きから嗅ぎだして色々苦痛の

徴候を現はしたとの事である。

敵の用ひた毒瓦斯の中には種類が色々あつて、單に視力を害するを目的としたものもあつて之に觸れると涙がぼろ／＼と止めどなく流れ出で結局明を失するに至る。又鼻官を刺戟するを目的としたものもあつて、之を嗅けば噴嚏が出て、遂に堪へきれずしてマスクを掻き棄てるやうになる。マスタード瓦斯と稱するものは敵の用ひた中では最も有毒なものであつた。これを吸入すれば窒息に依て即死するのみならず、皮膚を侵されると焦傷を起しピリ／＼として耐へ難く、即死せざるまでも身體精神の感覺を失つて普通の療法では直らず、結局死ぬるやうになる、此れは又普通の被服には地質を透し、又此の氣に飽和した地面を跣足で踏めば火傷を起させた。

獨逸が千九百十八年の春季攻撃に用ひた毒瓦斯は即ち此のマスタード瓦斯であつた。然かしながら此れも殺人瓦斯としてはまだ／＼理想的なものでなかつた。之を吸収するものは窒息するけれど、皮膚に觸れたばかりでは廣く身體の大部分を侵されぬ以上は即死するやうな事はなかつた。

イープルの第二次會戦後、化學者が理想的な毒瓦斯を工夫するに當つて先づ三の性能を標準に立てた。即ち第一は無色透明で、眼に見えず、敵に向つて不意撃を加へ得るものである事、初期の瓦

斯は少量を放つても空中にその色を現はすから敵の眼に著いた。第二は大氣よりも重くして地上に沈降し、塹壕の底の底にまでも滲透するものである事、第三は身體の何處でも露出した部分に觸れると直ぐ全身に毒を及ぼして即死せしむるものである事、というのであつたが、發明工夫の才に長ずる米國人は見事に此の理想的瓦斯を造り出した。此れは即ちルイス瓦斯と稱せらるるもので、米國ノース・ウエスタン大學化學部長ダブリュー・リー・ルイス 教授が大統領の命令を受けて戦争中から着手して丁度休戦少し前に之を造り上げた。聯合軍は同年中これを實戦に用ひ、獨逸軍を攻撃する積りで盛んに製造した。

**ルイス瓦斯** 此のルイス瓦斯は今日まで發明されたものの中で一番恐ろしい物である。無色透明であるから其の色を認める事が出来ない、空氣より重くして下に沈むから塹壕の最下底に潜む兵士をも斃す、之を吸入すれば肺を破り死に致すのみで無い、皮膚のどの部分に觸れても忽ち全身に毒を及ぼして即死させる。動物のみでなく、植物をも斃し、すべての細胞生活物を斃す。而うして是まで戦場に用ひられた最有力の瓦斯よりも五十倍の發散力を有する。之を仕上げるまでに實驗費に五十萬圓を費したとの事であるが、此の瓦斯に對しては今日まで有効な防禦具が出来て居らぬとの事である。

ある。

當時米國技師はいふ、此のルイス瓦斯で以て歐洲戦場に使用されて居た一番大きな榴砲彈ほどの毒瓦斯彈を製造し、之を十二三箇ほど飛行機に積載して柏林を攻撃したならば、風向きさへ善ければ一舉にして全市の人民を殲滅し得たに違ひないと云つた。言、誇張に似たれども、甚だしき誇張ではないと云はるる。米國では戦後更に一種の恐ろしい瓦斯を發明したさうである。此の効力はルイス瓦斯の効力よりも大といふ譯では無いけれど、其の發散力はルイス瓦斯よりも遙かに増り、此れを以て手擲彈ほどの瓦斯彈を造つて之を投下したならば、四方數十町の間には毒瓦斯を散布せしめ其間に在る動物は勿論、植物をも倒して、爾後七年間土地よりは一草一木をも生ぜしめぬ事も出来ると云ふ。尙此の瓦斯を發生する原料品は何處の國にもザラあるから、電力の供給さへ無限ならば幾らでも製造する事が出来る。米國では電力は無盡藏であるゆゑ、所要の工場をさへ建築すれば毎日此の液體數千噸を製造する事は造作もないと云はる。

此種の毒瓦斯は陸軍にのみでない。海軍にも用ひられる。ルイス瓦斯の發明者ルイス教授は曰く將來の海戦には必ず毒瓦斯徹甲彈及び眼見るべからざる毒瓦斯の煙幕を用ふることとならう、随つ

て我々は防禦として軍艦全體を被護すべき瓦斯マスクのやうなものを工夫せねばなるまい。毒瓦斯は武器として爆裂性の武器よりも細い處にまで使用する事が出来て、使用すべき方面が多いのであるから、將來専門家は益々研究を積み此れを以て色々の武器を工夫し將來實戦に採用する、に至るに違ひない。

因て又曰く、將來の戦争は軍隊の強大なるものの勝利に歸せずして、智力を以て勝るもの、勝利に歸するは疑ひない。今後日を見るほど戦争の勝敗は獸的暴力の強弱、人力の多少に依らずして、科學的技能の優劣に歸する事とならうと。毒瓦斯を戦争に用ひるに至つたまでの人間の態度には實に三期の變遷を見る。第一期には毒瓦斯は人間の戦闘に用ふべきものでないとして之を斥けた。第二期には敵が用ふるからとて否々ながら之を用ひた。第三期には互ひに後れを取らずと熱心に其の益々有毒なるもの、發見を競ふやうになつた。かくして休戦後以來今日に至るまで各國は皆將來戦争起る場合には必ず毒瓦斯が盛んに使用されるものと見て、内々相争うて新發見に苦心して居ると云はる、今日まで世間に知られてゐる毒瓦斯ではルイス瓦斯が一番猛烈なものと見做されて居るが、其の製法は固より秘密である、然かし今日も尙秘密となつて居るか。たとひ秘密になつて居る

とも、既に、ある物があるといふ事が知れて居れば、世界の化學者がこれを發見する事は毫も天才に待たず、たゞ時日の問題である。今日までも歐洲の化學者は同じ物質から同様の偉効ある毒瓦斯を造り出したのである。各國中には現在既にルイス瓦斯以上のものを發見して居るかも知れぬ。將來の戦争は確かに智力の戦争となる。

## 二 飛行機は一個の巨弾

飛行機は歐洲戦争四年中にも、其の構造、搭載力、速度に於て多大の進歩を見たのであるが、ただ、人力の限りを盡して完全の域に達したと云ふ譯のものではない。今後それが益々改良されて完全に近いものとならば、一層其の威力を發揮して愈々恐ろしき武器となるは疑ひない。

爆弾投下用としての飛行機は其の實質から云へば丁度大砲の弾丸に比すべきである。飛行機の行動半径は大砲の「射程」に當り、さうして其の投下する爆弾の大小は大砲の「口径」に當る、飛行機の射程の長大は逆も大砲の及ぶ所でない。開戦當初千九百十四年の軍用飛行機は千九百十六年、千九百十八年の物から見ると眞に幼稚なものであつて、今日では専門家はこれを玩具ほどの物にも

見て居るが、然かし千九百十四年の飛行機でも射距離の遠長なる點に於ては如何なる大砲と雖もこれに及ぶものなく、根據地を飛出して五時間以上走りつゞけ一百哩の先きにまで往つて攻撃し得たのである。千九百十八年にはそれが更に二三百哩の先きまで飛んで往つて攻撃することが出来た。千九百十九年の春には約四百哩の先きなる伯林をも襲撃するの計畫まで立てられたのである。

飛行機の「射程」が遠大となり、其の搭載力が増加するに伴れて、その「口径」即ち搭載する爆弾の大きさも益々加はつて來た。千九百十四年には聯合軍側の投下して爆弾は其の大きいものと雖も、二百二十封度位なものに過ぎなうだが、千九百十七年に獨逸の倫敦襲撃用として造つた飛行機は一噸即ち二千二百封度の爆弾を搭載することが出来た（現に其の一隻が英國ウォリントン・クレセントで射墜されたのが寫眞に取つてあるが大きなもので機關銃五臺を据付けてあつた）。聯合軍側でも千九百十九年伯林襲撃用として製造した爆弾は高さが八呎許りで、中に爆薬又は毒瓦斯發生藥の一噸分を裝填してあつた。飛行機用の爆弾は大きさの點に於て何種の砲彈も之に及ぶものなきばかりでなく、又炸藥の裝填する分量に於ても遙かに之に勝つて居る。それといふものは、砲彈である」と口径と射程とが増大すれば彈丸を包むケースの厚さもそれに應じて増大せねばならぬのであり、

随つて又それだけ爆薬又は瓦斯發生藥の分量が減じて來る譯であるが、空中爆彈であつて見ると、其れは發射するのではなく、投下するのであるから、ケースを厚くするに及ばぬ。即ち砲彈ではケースの厚みで全身の大部分を取らるゝのも、空中爆彈ではケースは薄くして済むのであるから、火薬を充分に裝填し得るのである。當時聯合軍が計畫通りに、此等の爆彈に彈裂藥を裝填せず、ルイス瓦斯を裝填して以て伯林を攻撃したとしたならば、前にもいふ如く伯林の全市民何百萬は一撃の下に殄滅し盡されたに違ひない。

**投下彈の命中率** 然がなかし空中砲撃は歐洲戦争中の經驗ではまだ命中正確とまでは往かなかつた。此れは飛行機の性質として當然しからざるを得ぬのであつて、飛行機は地球引力の關係から一處に停止する事が出来ず常に游動して居らねばならぬ。陸上の砲臺であつて見ると固定した砲臺から彈丸を發射するのであるから、ゆつくり照準を定めることが出来るけれど、空中爆撃では進動止まざる臺の上から投下し、且氣流の關係もあるのであるから、どうしても、彈丸の命中率は陸上發彈の精確なるに及ばぬのである。然かし其れにも拘はらず、空中爆撃の精度も戦争中に次第次第に進歩した。千九百十四年及び千九百十五年の爆彈投下といふは、たゞ漠然と廣い都市全體を目標と



して投下するに止り、其の中の特定物を目標としてこれに命中さすといふやうの手際は先以て偶中といふやうな譯であつたが、千九百十八年にはその投下する爆弾は十中八九その目標に命中するやうになり、或は命中せざるまでも遠く外れて全然見當違ひな處を打つといふやうな事はなくなつた勿論これは飛行機其物が改良されて安泰不動、命中正確な器械となつたといふのではない、主として爆弾を投下する飛行家の技倆が進歩した結果であつたのである。

其後飛行機も武器として益々改良されて、最近に至り驚くべき發明といふは無線を以て飛行機を地上から操縦し得るやうになつた事である。これは休戦當時米國の一技師が從來平和的事業に應用する目的を以て行はれて居た無線に關する多くの發明を寄せ集めて工夫し出したのであるが、將來戦争の場合には驚くべき働きをなすに違ひない。操縦者は一人も乗り込まずして宜い、無線を以て地上から一進一退意の儘に操縦し得るのである。斯うなつて見ると飛行機は全く一箇の超大砲スーパーガンであつて、其の搭載力の全部を擧げて爆弾又は毒瓦斯彈を搭載する事が出来るやうになる。此の點から云へば又た飛行機は一箇の自動砲彈ともいへる。之と同時に飛行機其物も最近には其の機關の大改良に依て好砲臺となり、投下爆弾の命中率は著しく増進するやうになつた、そこで空中射撃の妙を

得たる専門家が一人飛行機か、飛行船に乗込んで後方に數隊の爆撃飛行隊を隨へ、敵機來襲の場合には之をして防戦せしめつ、我が目標とする都會或は要塞に向つて行進し、その上空に至つたところで程合の處を見計らひ、爆弾を投下する、技倆は確かなり、飛行機は立派なり、殆んど百發百中の偉功を奏し得る事であらう。斯うなれば飛行機はまた自動砲であつて、歐洲大陸の上をも、亞米利加大陸の上をも東西南北に荒ばれ廻つて敵に思ふやうの損害を加ふることが出来る、その効果は眞に慄然として恐るべきものあるに違ひない。

### 三 戦場の霸王たる重砲

重砲は歐洲戦争に於て矢張り一方の霸王であつたから、將來戦争の場合にも矢張り毒瓦斯や他の武器と共に猛威を逞しうするであらう。蓋し毒瓦斯は猛烈といふと雖も、此れのみでは塹壕堡壘家屋工場橋梁鐵道を破壊するの力はない。各種の障礙物を爆破して攻撃の進路を開くものは矢張り重砲に待たねばならぬのである。後に記すやうにタンクが益々改良されて強大なものとなつて、此の重砲をタンクの中に装置するか、或はタンクに繫架し得るやうになつたならば、重砲が地形の險夷

に依て其の運動力を制限せらるゝ點は大に減じて来る。要するに將來重砲隊は是まで馬匹や自動車に頼かれた時に比して其の運動力を著しく増大し、其の威力を益々發揮するに至るであらう。

重砲が歐洲戦争に依て十分に其の破壊力を現はした事は深くいふまでもない。ヴェルダンの戰場を訪ふものは四面荒涼たる光景に接し、殊に其の附近一帶の地中には一方米突毎に約一噸の鐵が撃込まれてあり、又平均三人の屍骸が埋つて居ると聞いて今更現代戦争の殘害を思ひ、又白耳義から佛蘭西の戰場となつた處は、町といふ町、村といふ村は皆破壊されて煉瓦壁のみ淋しく立残り、田圃は彈丸の斷片を以て荒廢に歸したるを見て、此れまた新式戦争の慘酷なるに驚くといふ。凡て此等の財物および人命の破壊は主として新しい巨砲巨彈の威力である。戰場では兵士は此の増大せる破壊力に對して昔からある方法に改良を加へ、地下に塹壕を掘つて身體を防護したか、破壊力は防禦力よりも遙かに偉大なのであるから、先般の戦争が此の如き慘狀を呈し、人命財物の破壊率の空前であつたことも偶然でない。

**長距離砲の將來** 人命財物を一と塊りに破壊するものとして、又命中正確なるものとして固より何物も重砲に優るものは無い。然かしながら人間の工夫力には自ら限度があるものであつて、或る

程度まで進むと如何に工夫を凝しても其れ以上一步も進めることが出来なくなる。軍事専門家は一般に重砲及び砲彈の改良は今既に此の極點に達したと云つてゐる。千九百十八年獨逸の用ひた有名なベルタ砲、即ち長距離砲は七十五哩の先きから巴里を攻撃したのであるが、然かし此の大砲は實用的なものでなく、唯だ獨逸人の士氣を鼓勵し敵の心膽を奪はんとするだけの物であつた。其の命中は正確とゆかない、巴里市中を目がけて打出したのであるけれど、彈丸はいつも巴里上空を通り越して四五哩先きに落ちた。

休戦になる頃、奥國でも同種の砲三门を製造してゐたが此れ亦畢竟何程のものであつたか、獨逸の長距離砲は砲身の全長約十二間、彈丸の重量二百六十四封度、その直徑は約一米突であつたといふから巨大には違ひない。此後佛國では更に獨逸の長距離砲の射程に二倍する、即ち百五十哩に達すといふ大砲を發明した、所謂ドラマース・マーズ砲と稱するもので、佛國の同名工兵中尉の發明に係り、千九百十八年十二月その計畫を佛國政府に提出したところ、政府は將來實用の見込みあるものとして之を買收し、爾後近き頃まで實驗中であつた。英國でも此の種の新砲に關して深く研究を加へて居たが、英國専門家等の説では、かゝる長距離砲は造つて造れないといふ譯はないけれど、

果してこれを造るほどの効能があるか。今日では飛行機といふ長距離砲があつて、飛行機は此等の長距離砲よりも五倍大の射程を有し、又その弾丸も長距離砲の弾丸の重量に五倍する重量を搭載し且其の命中は長距離砲よりも遙かに正確であり、又製造費も極めて廉であると、云つて長距離砲に重きを置いて居らぬ。

重砲や高爆薬は現在以上に大改良は出来まいと云ふが、先づ一般の定説であるとの事である。それは孰れにしても其の偉力の洪大にして將來戦争の場合には益々其の偉力を揮ひ縦横無盡に人命財物を難ぎ倒すべきものであることは疑ひない。

#### 四 陸上戦闘艦たるタンク

將來の陸上戦闘艦と稱せらるゝタンクは歐洲戦争中には大砲や爆撃飛行機のやうに直接に非戦闘員に影響を及ぼすことはなかつたが、新武器としては歩兵襲撃の場合に大にその人員及び損傷の割合を減じ、貴重なる人命を未死に救ふ効能があつた。將來戦争のある場合には更に色々の目的に利用されて、人命財物に對し大威力を示す恐ろしき武器となるに違ひない。

タンクは英國人の手に發明されたものであるが、聯合國は之を現戦争史上の最も重要な兵器と認めて、米佛兩國でも盛んにこれを種々の型種に造り出して戦場に使用した。此れは云はゞ古セミラミスの戦闘に象を用ひ、支那の田單が火牛を用ひて敵の陣地に押進め、敵兵を捲り立て脚下に蹂躪させたやうな工合のもので、器械の大象であり、火砲である。然かし此の武器も別に珍しい工夫といふではない、昔から戦争に用ひられた甲板と、ガソリン機關とカタピラ、ホイラーとを取りまぜて工夫したものである。然し戦術上には一變化を及ぼさしめたほどの効あつたもので、若し千九百十六年ソムの會戦に英國が思ひ切つて多数のタンクを製造し、大仕掛にそれを使用したならば、獨逸が毒瓦斯を思ひ切り用ひ潜水艦を思ひ切り使用した場合と同様に、此れのみで早く戦争の形をつけ、勝利を占め得たであらうと云はれて居る。此れは歩兵及びそれに運動力を附與する點に於ては、一箇の攻撃武器である。歩兵及びその携帶兵器を防禦して敵の陣地に邁進せしめる點に於ては、一箇の防護武器である。英軍は初め之を造り出したもの、自らその効力を信ぜずして本の試験的に使用したのであるが、實用の結果大に用ふべきを見て爾後、休戦に至る二年間大いに工夫を凝し改良を加へた。初めに造り出したものは不備不利の點も鮮くなかつた。例へば車體は自身の

重量高壓無弾力性に依て柔軟な地面では深く地中に減りこみ、地面を喰ひしめる力が不足なところから平滑な傾斜を攀登することが困難であり、河川に往き會へば其の重さに堪へるほどの橋がない所から河を渡過することが出来ない。石油の消費力多く行動半径短く、速度緩慢であつて最高のもとの雖も一時間五哩以上に出づるものが無かつた。随つて敵の標的となり易くして敵砲兵のために破壊される。總じて操縦が困難で大いに人力を要し、乗員を非常に疲労させた。其後出来たものは多く此等の諸點を改良して、速度に於ては一時間十哩若くは十二哩を出すやうになり、即ち其の初めは歩兵の疾駆する位の事に過ぎなかつたのが、略ぼ騎兵の戦闘するときの歩度を出すやうになり又初め用ひた時分には單に敵の機關銃隊を蹴ちらかすほどの事に過ぎなかつたが、後には自ら機關銃を据付けて敵の陣地めがけて敵を狙撃しつゝ、慕進し獨軍を辟易せしめた。

戦後諸國の軍器設計家は益々大型のものを造り出さんとし丁度、製艦設計家が戦艦から弩級戦艦、超弩級戦艦と押進めたやうに之を陸上巡洋艦、陸上戦艦となさんと工夫を凝して居た。何處の國でも之を製造する原料の鋼に不足なく、又莫大の經費をも愛まずんば益々大型の手に負へぬ物を造り出すやうになるに違ひない。それから又將來戦争の場合には戦術上新たに使用せらるゝ點

が多々あるであらう。軍事専門家は今その新用法を研究して居る。例へば前いふ如くタンクに重砲を装置すること、ならば重砲の運動力は非常に増加する。又戦艦行軍の際、輻重縦列にタンクを利用すれば其の運動力は自動車や馬匹を用ふるの比でない。今日野戦指揮官が苦心する問題は行軍縦列から戦艦隊形に散開するの困難である。行軍が普通道路に依らざるを得ざる所以は道路が最も便宜なるが故のみでなく、戦艦隊は其の彈藥糧食を車輛輸送に仰ぐが故であつて、車輛は道路以外の土地を行進し得る場合は至つて稀であるゆゑ、軍隊は勢ひ縦列の先方を行進するか。或は其の後方に跟随しゆかねばならぬ。其れですらも直接の須要品は兵卒自身で携帶せねばならぬのである。此の結果として一道路を進行する一箇師團が戦艦隊形に散開するには一日の大部分を要する上に、兵卒は銘々六十斤ばかりの須要品を携帶するので非常に疲労する。今若し現在所要の車輛をタンクに取替へるならば、行進軍隊の縦深を減ずるのみでなく、タンクは必要の場合には道路を外れて原野中を疾走し、軍隊をして自由に街道上を行進せしむるやうになるであらう。其れから又敵の毒瓦斯攻撃中もタンクの乗員に瓦斯に侵されざるやうに工夫をなしたならば、其の濼々たる毒氣中を突進して敵を散々に攻撃し、同時に味方の突撃隊をして先般の戦争に見たことないほどの猛威を揮はせる

ことが出来るであらうと云はれて居る。

**新改良型** タンクは今既に有力なる改良型のものが出来た。千九百二十年、英國陸軍大臣が議會に演説した所に依ると、英國では既に立派な新改良型のものを造り出して、將來陸軍はタンク戦といふ一特徴を示すであらうと云つてゐる。其の新改良型のもものは一時間に二十哩の速度を出し、平野の上をも、堤防壁の上をも、塹壕をも乗り越え押倒してぐんぐんと進み、一千哩を疾驅しても齒輪が甚しく磨損するといふではない。その重量は三十噸ほどあれど、煉瓦道路の上を走つても煉瓦を一枚壓し砕くやうな事がない。是迄のタンクの厄介といふは道路を壊すことであつたが、新型のタンクは道路を破らざるのみならず、反つて粗面な道路をも押し均すといふ不思議の効能があるとの事である。

**水上タンク發明** 之と同時に佛國では水上タンクを發明した。尋で米國でも、英國でも之を造り出した。無論陸上をも走るのだから、海陸兩棲の物である。陸に在ては堤防を攀ぢ、塹壕を乗り越え、海に入つては水上を航し或は海底に沿つて前進する。攻撃力としては一分間に彈丸四千八百箇を發射し得るホチキス八門を備へつけたものもあつて搭載力も極めて強大であるといふ。

然かしながら水上タンクは今日既に實用に供し得るやうになつて居るかは審かでない。英國のフリー大佐が最近の「第十九世紀」(千九百二十年十月)水上タンクに就いて説く所に依るに今日の水上タンクはまだ見事に水中を疾走すとはゆかぬ。然かしながら今後益々研究を如へれば立派なものにならぬといふ譯はないと。

左様なれば今日まで海を越え敵國に侵入するを困難とした上陸戦も實行容易となるとフリー大佐は同時に云つて居る。

**敵國上陸の可能** 歐洲戦争中にも艦隊援護の下にタンクを上陸させて敵の潜水艦根據地オステンドを襲撃せんといふ計畫も立てられたのであるが、第一にタンクを揚陸させる事が至難なので、終に實行に至らずして止んだ。若し其の際水上タンクが出来て居たならば、其の計畫は實行されたに違ひない。此れにつきフリー大佐は左のやうに説いて居る。

「今後水上タンクは立派なものが完成され、自己の推進機で水上、水底を疾走し得るものが出来るやうになるに違ひないが、然かし斯るタンクを軍艦に搭載して敵國海岸を侵襲することは固より困難な事であるから、別にこれを積載して一時間二十五乃至三十節の速度を出す運送船をも造り出

さる、こと、思はれる。さうなれば此の數隻の運送船に比較的小型な、然かも最も恐るべき威力を備へた水上タンクを積込み、軍艦にこれを護衛させて、遠く數千哩の海上を航走して敵地を襲撃せしむる事が出来るのである。

「敵國上陸に就て今日まで軍事上第一に困難とする所は軍隊を運送船に積込んでいつて、急速にこれを敵地に上陸せしむる事である。艦隊が海上權を制握して居さへすれば、(海上權の制握は先決要件である)此の運送船を護送して敵國海岸に上陸せしめ、敵の不意に乗ずるは難事でない。敵に航空隊あつても差支へない、敵の我航空隊は我が艦隊の海岸に接近しつゝ、あることを探知して、本國政府に報告するに違ひないけれど我が艦隊が如何なる地點に碇泊するかを確實に突きとめる事は出来ないのである。

「然かしながら艦隊が目的地點に到達すると茲に新しい困難が起る。軍艦は陸地に這ひ上ることは出来ない。上陸隊は游泳して上陸することは出来ない。此の運送船から軍隊を揚陸させるまでには相當の時間がかつて、昔しシーザーやウィリヤム公が英國に軍隊を上陸させた時と同じやうに相當長い時間を取られるであらう。敵國上陸の成功は敵に奇襲の機會を與へざる事である。敵は我

が軍隊の上陸を企つるを知るや、鐵道に搭乘し來つて上陸軍を邀撃し、上陸を阻止せんと試むるに違ひないから、上陸作業は神速に行はねばならぬ。

「今若し完全な水止タンクが出来て居たとすれば、艦隊は直ちに護送し來れるタンク隊を水上に放つのである。タンクは自己の推進機で水中を走つて敵の海岸に攀ぢ登り、一時間十哩の速度を以て内地に突進するから、上陸後二十四時間以内には敵地深く百五十哩の地點にまで侵入することが出来て、其間附近の都市村落に向つて爆裂彈や瓦斯彈を放つであらう。タンクが一週間の行動半径を有し得るものとすれば、此間に敵國內を縦横に暴れ廻つて至大の損害を加へる事が出来る。若し優勢なる敵に出會する場合は必ずしも抗戦するに及ばず、元の方に引返しつゝ、も其の道々海岸地方數百哩の間を荒らし廻つて、最後に海岸に駆け出でて水中に飛び入り、我が艦隊の許に逃げ歸るのである。

「斯るタンク陸隊が三四箇隊もあつて、各自相分れて敵國海岸線の諸處に上陸し、その携行する爆彈、毒瓦斯彈を打放つて縦横無碍に國內を暴れ廻つたなら、敵は奔命に疲れて何等爲すこと能はざるべく、敵の混亂は想像さるゝ。」

**上陸戦と飛行機** 飛行機も水上タンクあつて始めて存分に活動することが出来る。「飛行機が單獨海上より敵國に侵入するには海上に根據地がなくてはならぬ。戦艦の甲板をその根據地とするか或は巡洋艦大の航空母艦をその根據地とするか、然らずんば別に何等か水上を利用して根據地を設くる工夫をせねばならぬが、戦艦を根據地とすることは戦艦に取て厄介である、又巨大の航空母艦となれば勢ひ速度鈍く且製造に巨費を要する。何れにしても飛行機は敵地に在て長く陸上に休息することも、又空中に留り居ることも不可能であるから、必ず此の根據地なくては十分敵國內に活動することが出来ぬのである。

「然るに今タンク軍が敵國內に上陸するとすれば、タンク軍は一日に百哩乃至百五十哩の割合を以て敵國の内地に侵入することが出来るから、飛行機隊は軍の在る所を直ちに根據地となすことが出来て復た海上に根據地を有する必要がなくなる。左様なつて始めて飛行機は縦横自在、思ふまゝに敵國內を暴れ廻ることが出来る。」

フーラー大佐は更に説いて曰く、近代の戦争は主として經濟上の争ひから起る。此の戦争は一家の野心を満足せしむる爲めの戦争ではなくして、國民の生存を確保する爲めの手段であれば我

我は此の國民の眞の要求を満すやうな軍事政策を定むると共に、此の政策を最も有利に遂行するやうに努めなければならない。商業上の競争から起る戦争は敵を殺し敵を傷け、敵の物を掠奪し破壊するが目的でない、此の如きは畢竟將來の我が華容の購買力を損傷し破壊し、我が繁榮の具を自滅さすものである。我々の政策とすべきは壤土相接する國に在ては陸軍は敵の意思の表れたる政府を速かに撃倒するに在る。海上相隔つる所の國に在ては海軍は敵艦隊の根據地、貯炭所、船渠、軍港其他の沿岸重要都市を破壊し、陸軍を上陸せしめて敵の政府を攻撃せしむべきである。フーラーは敵の首府、海軍根據地、重要都市を攻撃するにタンク、飛行機に依て盛んに毒瓦斯彈、焼夷彈を使用すべきを説くのみで、それが非戦闘員に如何なる効果を及ぼすかに説き及んで居らぬが、彼れ亦此れを以て現代戦争に於ける軍事上の必然と思惟し居ると見える。

### 五 新殺人器の發明に没頭す——光線及び病菌

以上今日まで陸戦上に知られた首要な武器に就いて説いたのであるが、今後更に又如何なるものが發明され使用されるに至るであらうか。アウインは此に説き及んで、英國の有名なる一將校の

論文中から左の言を引いてゐる。

「先般の歐洲戦争に参加した軍隊なるものは昔から軍人に依て使ひ古された時代後れの戦闘器械である。技術家が其の事を善くするには器械の鋭利を競ふ如く、戦争に於ても先づ其の器械を精鋭にしなくてはならぬ、又左様なるに違ひない。今日迄のやうに攻撃防禦の新武器又は新方法が一般技術家の發明に待つやうでは駄目である。參謀本部は戦争中のみならず、「戦争」と「戦争」との間の小康期間に於て、高等専門家及び發明家を動員して、彼等をして満身の精力を傾倒して人間を殺す新しき器械や方法を發見せしむるやうにしなくてはならぬ。」

アーウィンはいふ、現在世界の餘力ある國では此等の説を待つまでもなく、戦後既に専心研究されつゝある。化學研究所は各國に設けられ、化學者及び技師は休戦以來、未知の殺傷破壊の器械方法を探求して居る。表面には現はれないけれど、將來再び戦争起る曉は必ず人を驚かす新武器が現はれるに違ひない。米國のスウイントン少將は左のやうに證言して居る。

「……此外に光線を以てする戦闘方法がある。既往の進歩より推して考へるに、將來再び戦争ある曉は此の毒瓦斯にのみ依頼することなく、人間の力の及ぶ限り一切の自然力を利用して新戦闘器械

が發明さるゝことと思ふ。今日既に各種の光線を利用して人間を殺す目的に供用せんとする傾向が見えて居る。此種の殺人光線が造り出さるゝ日も必ず遠くはあるまい。

「更に予の見る所を以てすると、人間戦争の最後の武器は病菌であらうと思はれる。人間の最終戦争は必ず此を以て戦はれ、結局人間は全く戦ひ滅びて仕舞うであらう。世界に戦争なるものを絶滅し得ずとすれば、人類は結局戦争に依て亡ぶるに至るは疑ひない。戦争に負けざらんと欲せば準備せよ。今の内に準備せよ。我々は此等のもろもろの戦闘器械及び其の使用法に就て深く研究せねばならぬ。我々は出来る限りの精力、時間、金錢を投じて我國の發明家及び科學者を獎勵して大仕掛に人間を殺す新戦闘方法を研究すべきである、今日までのやうな一時に少人數を殺して満足して居るやうな方法は今既に時代後れである。」



#### 第四 将来の戦争を想像す

(一) 次の戦争の一特徴——毒瓦斯戦——軍人の意見、(二) どのやうに戦はるゝ乎——歩兵の用不用——上陸作戦、(三) 毒瓦斯に對する都市防禦法、(四) 殺人光線及び病菌、(五) 人命の損害、(六) 財物の破壊

将来の戦争が如何なる戦術を以て行はるべきかは今想像することが出来る。新式武器の威力は今日益々發揚した、陸戦には飛行機がある、毒瓦斯がある、タンクがある、重砲をも之に加へねばならぬ。海戦には潜水艦がある。次に戦争は軍隊と軍隊との戦争でなく、一般人民を目的とする戦争となつた。此等の諸要素を併せ考ふれば将来の戦術が如何に行はるべきかは誰にも想像がつく。将来の戦争には先般の戦争と等しく交戦國は此等の強猛精銳なる武器を従横自在に使用するに違ひない。此の結果戦争の惨害を受くるものは獨り軍隊のみでない。男も女も老ひたるも幼きも均しく戦争の犠牲となる、而うして此の戦争の一特徴は瓦斯戦であらうと云はる。

#### 一 次の戦争の一特徴——毒瓦斯戦

将来の戦争が一般國民を目的とする事は獨りアーウインの説くのみならず、専門軍人の多くもみな之れを説いて居る。歐洲戦争に於て普魯西の一將校は千九百十八年語つて曰く、佛國は羊群である、獨逸は狼である、佛國の軍は羊群の番犬である。狼が番犬と戦ふのはたゞ羊群を取喰はんが爲めに外ならない。我等の目指すものも佛國といふ羊群であると。此の意は如何なる方法をも辭しないといふ事を含む。

聯合軍も始めは斯る彈鬪方法を考へて慄然とした。獨逸も流石に躊躇した。前いふ如く、毒瓦斯弾は軍の後方に向つて用ひられたことは無かつた。アーウインも「予は戦線後の都市に毒瓦斯攻撃の行はれたことを一度も見たことが無い」と證言して居る。然かし此れは戦争が早く濟んだが爲めである。獨逸は千九百十八年には一步進まば毒瓦斯攻撃に移るまじきまでに攻撃の歩を進めて居た若し戦争が長く續いたならば巴里は是までに見ざる悲惨の空中攻撃を受けたに違ひない。獨逸の計畫いふは斯うであつた。まづ先發隊として飛行隊一隊を繰出し、巴里の上空何百箇所の上から小

爆弾の何噸といふものを投下するのである、爆弾には燐をつめてある、燐はどんなに水をかけても消えない。爆弾が破裂して燐が燃え出れば、巴里は忽ちにして一面の火となる。そこで第二隊、第三隊と飛行隊を順々に繰出して、此の火光を便りに市中の要部要部に盛んに爆弾を投下する。飛行隊は月光りでは思ふさまに働くことが出来ぬけれど、此の市中一面の火車には十分に標準を定め、巴里の致命部を思ふさまに攻撃するこゝが出来るのである。

戦闘が此處まで進んで来れば毒瓦斯弾を用ひるに至るか否かは最早や問題でない。必ず更に進んで毒瓦斯攻撃を行ふに至るは必定である。聯合軍側に於ても前いふ如く、千九百十九年には夫の恐ろしいルイス瓦斯の發生液を大爆弾に装填して柏林を攻撃する計畫を立て、居たのである。但し聯合軍は「敵からしかけらるゝでなくんば」これを決行するまでの勇氣は無かつたでもあらう。去りながら戦争が延びて千九百十九年に及び、更に千九百二十年に及んでも尙勝負がつかなかつたとならば、聯合軍も其時は不本意ながらも此の計畫を實行し、柏林の市民何十萬、何百萬といふものを屠り盡さんと試みたに違ひない。

將來再び戦争起る場合には、首府及び重要都會に對する此種の毒瓦斯攻撃は必ず無遠慮に決行せ

らるゝものと豫期せねばなるまい。各國參謀本部は戦後既に大戦争に現はれた戦術の諸變化及び武器の新發明に就いて、綿密研究を加へて現在發見され居る瓦斯を以てしても、飛行機を以てしても、巴里、羅馬、倫敦、其他如何の大都會をも一夜の内に凄涼悲惨なる墓地と變じ得ることを知て居る。蓋し軍人は或はかゝる戦闘方法を決行するに躊躇するかも知れぬ。軍人とても情を知る人間である且古來軍人は其の體面上、非戦闘員を殺すことを非常に恥辱として居たから、流石にかゝる行爲に出づるを嫌忌することゝは思はるゝが、然かし戦争は非常事である、敵が如何なる行動にも出でまじきことを知る上は我に於ても之に對する作戰に出づるに違ひない。今日既に世界にはかゝる戦闘方法を決行するに足る武器は寡くとも二つあるのである。何れの國も之を製造する資金と之を使用する力とにあらば、萬一の場合此の戦闘方法を決行することが出来るのである。此の方法は敵を倒す極めて有効な手段といふことであつて見れば、己れ進んで之を使用する意思なきにもせよ、敵が忌憚なく之を用ひるに於ては、結局我に於ても同様の手段を取つて之に對抗する外あるまい。

### 軍人の意見

次に本職の軍人の意見を見てみよう。米國陸軍のミツチエル副少將は同國代議院特別委員會で左の如く證言して居る。

毒瓦斯は將來戦争ある場合には必ず飛行機に依て用ひらるべきは各國みな之を豫期して居る。或る種の毒瓦斯を何程用ふれば何程の地域に撒布することが出来て、而うして又其の瓦斯が一定の期間中人を殺す効力を失はざることには我々はみな實驗に依つて知つて居る。若し我々が十哩四方の區域、丁度紐育市ほどの區域に毒瓦斯攻撃を行はんとせば八日目に一回クライング瓦斯を約二噸ばかりを使用すれば宜い、紐育の如き人家櫛比の地は恰好の標的となる。又マスタード瓦斯ならば八日目毎に約七十噸を使用すれば宜い、又フォスジン瓦斯ならば二百噸を使用すれば宜い。無論一回で全市の人を殺すに足る。

米國化學局化學研究部長ブラッドナー氏は前に述べた同國最近の發見にかゝる毒瓦斯に就いて下院海軍委員會に出頭して左の如く證言した。

化學局が最近發見した液は僅かその三滴を人の皮膚に觸るれば忽ち全身に毒を及ぼして其の人を即死させる。飛行機一臺に此の液二噸を搭載してゆけば、幅百呎、長さ七哩の地域に此の液の雨

を降らし、其間にある凡ての人を殺すことが出来る。人がマスクを箝めずに居ると其の斃死の程度は七倍に上る、都市を攻撃する場合などは殊に左様である。此の毒液を製造するには造作はない之を造る原料は何處の國にも在るから、たゞ電力の供給に十分であれば宜い。米國などでは必要な工場を建築さすれば毎日數千噸を製出することが出来る。歐洲戦争のアラゴンヌ攻撃中、米國第一軍百二十萬が長さ四十基、幅二十基の地域に亘て陣を張て居たが、若し其時獨逸軍が此の毒液四千噸と飛行機三四百臺とを持つて居たならば、十時間か十二時間の内に米軍を一人残らず斃すことが出来たであらう。歐洲戦争で米國軍の死傷の三割餘はみな毒瓦斯のために斃れたのである。將來戦争で毒瓦斯を用ふる場合には死傷の割合は遙かに之れよりも上るであらう。

前にも挙げたジェー・エフ・シー・フリーラー名譽大佐は前年英國に於て將來の戦闘方法を論じた一篇の文章をロイヤル・ユナイテッド・サーヴィス協會に提出して金牌を得た。此の論文に於ても大佐は非戦闘員に亘る方面を避けてたゞ單に其の軍隊を斃す方法に就いて論じて居るのであるが、尙毒瓦斯の一般に使用さるゝに至るべきことを力説して、此を以て將來の唯一武器たるべしと云つて居る。大佐は曰く、

今日まで用ひて功あつた一切の毒瓦斯防禦具では追つかぬ色々な恐ろしい瓦斯が將來發明されるべきことは少しも疑ひない事である。人は飛行機を以て毒瓦斯を盛つた圓柱一百本を一時に放下し得るならば、數百萬本を一時に放下し得ぬといふ理由はないのである。實際の處今日既に電氣仕掛に依て數百萬本の圓柱をも放下し得らるゝやうになつて居る。片腕の不具者も亞細亞のはてカムチャツカに在て指針を按じ順風の時を見定めて電氣裝置を操縦すれば、英國の内地に數百萬本の毒瓦斯を撒布することは容易な事である。

又英國陸軍のイー・デー・スウイントン少將はフリーラー大佐の意見に賛同を表して曰く、

今日まで我々は小規模に敵を斃すことを考へ、例へば五十人宛か百人宛か、或は數千人宛を殺すことをのみ考へとするが一般であつたが、既に毒瓦斯といへば此れは大規模に人を斃す武器であることを記憶し置かねばならぬ。毒瓦斯では一度に數十萬人を斃すことが出来る、寡くとも戰鬥力を失はしむることが出来る、此れからの戦争に此の毒瓦斯が用ひられぬと豫言すべき理由は一つも見當らぬ。

## 二 どのやうに戦はるか

飛行機、タンク、重砲が今後如何に進歩改良さるゝかは既に説いた、然らば將來戦争はどのやうに行はるゝであらうか。アーウインは左の如く説いて居る。

「今假に獨佛兩國が將來再び新式兵器其他一切の軍備を十二分に整へて戦端を開始すると想像する先づ此の戦争は一朝突如として發生するものを見ねばならぬ。日露戦争は無宣告開戦の先例を開いた。フリーラー大佐曰く、今後戦争起る場合には宣戦の布告を見るやうな餘裕は有るまい。但だ熱帯地方で驟雨を見る時の如く、空が一面に掻き曇つて豆粒大の大雨が急にさつと降つて來るといふやうな其の曇りを見る位な豫報はあらう。敵が開戦の宣告をなさぬからと云つて躊躇するはフォントアの仁である。フォントアが反身になつて軍帽の羽毛を顔はしつゝ、大氣取に氣取て、「佛國の紳士よ、いでお先に發射されよ。」そんな愚を學ぶものは有るまい。

「其時獨逸は最先に毒瓦斯の少しも透透せぬ排氣裝置を施した大小各種のタンクに、毒瓦斯彈と爆彈とを裝置したものゝ先發隊として國境に向つて繰出し、其後にタンクに据付けた重砲隊を押し進め

先づ先發タンク隊をして敵の境内に突進し、高爆彈攻撃の進路を開かしめるであらう。佛國側に於ても此種の攻撃あるを豫期して應戰の準備を整へ居るであらう。佛國は國境一帶、即ち瑞西から北海上に至る長さ四百哩の地帯一面に毒瓦斯管を植え列ね、敵襲來すと見れば號令一發の下に毒瓦斯の煙幕を漲らして敵の前進を阻止せんと圖るであらう。佛國は開戰の始めは先づ此の防戰法に依頼するに違ひない。其れが十分の功績を擧ぐるならば佛國は茲に動員の時間を得ることとなる。此時獨逸軍が此の毒瓦斯の煙幕を冒して其の排氣裝置あるタンク隊を押進めるか、或は毒煙の消散するを待つて徐々に突撃するか、孰れにも何様かの手段あるに相違なく、排氣裝置ある齊射隊をして毒煙中を突進せしむることも出来るのである。獨逸軍がその孰れの方法を取るかは、歩兵を如何に使用せんとするか考へに依つて定まる。此れは一箇の根本問題である。

### 歩兵の用不用

「軍人中には樂觀説をなして、今日まで戦争では歩兵は毎に戦争の骨幹となつて居たが、新戰闘方法では歩兵が是れまでのやうに密集して攻撃するやうな事は無くなるであらう。タンクは將來の

騎兵であつて、會戰の勝敗を決するものは此のタンクであらう。然かしながら如何なる國といふといへども其の動員した兵卒を悉く搭載するに足るだけのタンクを製造するほどの鋼を有するものは無いのであるから、歩兵隊も少し位は必要であるであらうと。

「多くの軍人は此の見解に賛成して居らぬ。其等の言ふ所によると、今日まで歩兵を全廢すべき程の器械は一も出來て居らぬ。如何にも砲兵は最近の歐洲戦争にも戰場の帝王であつたのであつて各國は資産を傾けて益々大砲及び破砕彈を製造することに務めたのであるが、然かも其の中にも歩兵は依然として本來の任務を失はず、各國參謀本部は常に大砲の益々多からんことのみならず、又兵士の益々多からんことを要請した。敵の陣地及び領土を奪取占領するは是非とも歩兵の大團體がなくてはならぬと。斯様にして彼等は此の古來の戰闘方法の基本的規則は次回の戦争に於ても左して變ることには有るまいと云つて居る。然かし將來の戦争には歩兵はその銃を棄てて瓦斯手擲彈を携帯することになるかも知れぬ、去りとして小銃の携帯が全廢されるやうな事はあるまいと。

「將來の戦争は歩兵の接戰を見ることあるか否かは稍々疑問である。然かし接戰の有無は疑問にもせよ。その死傷は必ず多大であるに違ひない。多分歩兵は後方に留め置かれて、他の諸兵種が敵の

一切の抵抗力を破砕し了つた後始めて前面に招致され、進んで敵の陣地を占有するやうな事になるであらう。但し其の間も安穩であり得ることはない、敵の航空隊は歩兵に向つて空中から攻撃を加へるに違ひない。

「敵の航空隊は我がタンク侵入隊が國境煙幕中に進み來らぬ前から、防禦のため國境に向けて派出しあるであらう。前いふ如く、飛行機は今日でも操縦者を乗組ましめず、無線に依て陸上からこれら運用することが出来るのである。かやうにして飛行機は何人の豫想も及ばざりしほどの射距離及び口径を有する一個の自働彈丸となつたのであるから、一朝開戦の場合には無線に依て指揮さる、航空隊、其他機關銃、高爆彈、毒瓦斯彈を以て武装された他の航空隊は各々敵者の歩兵隊を探し出して攻撃を加へんとするに相違なく、而うして攻者側に於ても航空隊を出して敵の航空隊を攻撃せしむるであらう。斯くして開戦と同時に地上にはタンクは濃煙中を暴進して交戦し、上空には航空隊は火花を散らして接戦する。其時航空隊は攻者防者の別なく、その間を馳せ抜けて已れが攻撃目標に到達し得た方のは、その目標が軍隊に在ると都市に在ると問はず、之に向つて爆彈や毒瓦斯彈をどしどし投下するのであるから殺傷の至大なることは歐洲戦争のヴェルダンに於ける殺傷の如きは

此れから見れば、昔の弓矢の合戦に見る死傷ほどにも見えぬであらう。

「斯る將來の戦争は決して長く續くことは有るまいかと思はる、けれど、斷言することは出来ぬ。兎に角初次の攻撃は引分けに終るものと假定すれば、双方茲に暫く境界沿線の毒瓦斯攻撃、都市の空中攻撃に移り、同時に双方とも軍需品の製造、決勝戦の準備に餘念なきことと察せられる。死傷の點に於ては言ふまでもなく初次の攻撃のみで兵士の死傷、財物の破壊、最近戦争の其れに勝ると幾十倍に上り、同時に非戦闘員にも之れにも勝る無数の死傷を見ることであらう。」

我々はこれに加へて云はん、兩交戦國が海上を隔つる國であると、茲に上陸作戦を見るであらう。從來殆ど不可能と見られた上陸作戦も前いふ如く水上タンクの發明に依て一方が海上權を制握し得る限りは此の作戦は可能となつたのである。一方の交戦國は艦隊又は特製の運送船にタンク上陸隊を搭載して敵國の海岸に到達し、敵兵の不意に乗じて諸處にタンクを上陸させ、同時に航空隊を放つて共に敵の國內に暴ばれ廻さす。タンク上陸隊や航空隊は新しい破壊武器、即ち魚雷、毒瓦斯彈、燒夷彈等を放射すれば、我に相當の防備なき限り、我が首府も、工場中心地も都會も敵の蹂躪に委せねばならぬ。將來の戦争には斯る事あるを豫期し居らねばなるまい。

## 三 毒瓦斯に対する防禦法

かゝる新戦闘方法に對する普通人民の防禦法は如何にせば宜いかは、極めて困難な問題である。爆彈又は毒瓦斯彈投下の飛行機に對しては飛行機を以てすべしとするも、毒瓦斯其物に對しては如何にして防禦するか。我等は軍隊軍人の身體を防護するのみでは足りない、又都市の一般人民、即ち老若男女、非戦闘員を防護するの準備なくてはならないのである。古來の例に依るに、新しい武器が戦争に使用さるゝ時分に之に對する有力の防禦具が發明さるゝまでには相當の長い歲月がかゝつて居る。刀や矢は有史以前から使用されて居たけれど之に對して身體を防護する甲冑の發明されたのは有史時代もずつと進んだ後の事である。砲彈に對する最良の防禦法は地中に穴を掘つて其の中に潜むに在りといふことは、昔から知れて居た事であるけれど、其の方法が十分に講究されて遍く利用さるゝに至つたのは、眞に最近の歐洲戦争に於てである。初次獨逸の毒瓦斯攻撃に對してマスクの發明された事は前にいつた。此のマスクは相當防護の機能を舉げたけれども、其の使用法は面倒臭く且十分であつた。後に出來た獨逸のマスタード瓦斯や、米國のルイス瓦斯に至るとそんな

粗末の物では十分の功績がなかつた。此の毒瓦斯は共に皮膚を侵し、一は大火傷を起させて治療の術なく、一は忽ちに全身に毒を及ぼして命を取る。現在これを防禦する方法として考案中に屬する方法が二通りある。其の一は毒瓦斯を消す力ある藥品から造つた膏を全身に塗抹することである。休戦少し前英軍はマスタード毒瓦斯の防禦法として軍隊に此の方法を採用せしめんとしたが、膏は全身に塗つても數時間と塹壕内に寢轉ぶか、或は進軍中なら暴雨にでも遭ふと膏は班々に剥けたり、或は洗ひ落される。其れよりも出来る事なら化學上から考へて十分の消毒力ある被服、帽子、手袋や顔一面のマスクを造り、それを著けさせるやうにした方が効能があらうといふ、つまり全身にマスクを施す事であるが、どんなものか。兎に角今後軍隊に新戦闘方法に應ずるに足る制服を新造する必要がある。今一の方法は前進軍隊はすべて外間に暴露させず、瓦斯除けの装置ある装甲自動車に乗せて前進せしめんといふ事である。

然かし軍隊には此等の方法あるとしても、普通人民に對して叙上の防具をつけさせることは軍隊に對するよりも數層困難である。將來戦争起る場合大都會の住民に一人残らず防護用として膏を全身に塗らせたり、或は身體一杯のマスクを嵌めさせることが出来るであらうか。歐洲戦争中、戦線

にあつた將校は敵襲の危険ある時でも、兵士にマスクを嵌めさせることは極めて困難であつて、中々命令通りに行はれなかつた云つて居る。倫敦や巴里の人民の如きに對して戦時身體に膏を塗り、或はマスクを嵌めさせるには、平生から軍事教育を施して人民を訓練し置く必要があらう。其れには小學校時代から始めた位では無益である、搖籃の中にある時から始めねばなるまい。瓦斯除けの被服を着けさせるといふことも同様である。必ずうまく行はれるとは受合はれぬ。其上に經費も鮮からぬ高に上る。

軍隊の防衛に對して、フリーラー大佐は「防衛中心地」といふことを思ひつき、戦線の後方に一箇の敵要塞のやうなものを造り、此内に豫備隊を置き、タンクの修繕所を設け、彈藥の補給も此内にすることにしたなら宜からうと云つて居る。我々はこれに倣つて一般人民のために都市を改造して「防衛中心地」を造るも宜からう。斯ういふ事は歐洲戦争中にも不完全ながら行はれた。例へばヴェニスヴェネチアの如き屢々敵の襲撃を受けた都會では他中深く土窖を穿ち沙囊を以て岸壁を築き、丁度軍隊の使用する塹壕のやうなものを造つた。然かし人民は土窖の底に立て籠つても、ルイス瓦斯のやうな毒瓦斯は地底までも沈下して細胞を傷け命を取るものであるから、そんな事では決して防衛の具とは

ならない。苟も隠れ場所とする以上は、それは極めて廣大な物で全市の人民を残らず收容することが出来且又深く地の底まで掘下けて、その岩壁は巨大な砲彈の非常な爆發力にも耐へ得るやうにし、且毒瓦斯も滲透し得ぬやうに工夫せねばならぬ。而して毒瓦斯を滲透せざらしめんとするには、空氣も通はぬやうにせねばなるまい。空氣を通はせずして生物が其中で生きてゆくやうにするには、酸素を十分に取入れ置く工夫が必要となるが、左様するには結局消毒藥を通して外間から空氣を引くやうにせねばなるまい。そのみならず其の土窖は地下鐵道の如く外界との往來も自由になし得られるやうにせねばならぬ。此れは都市の全然改築である、逆も出来る事ではない。

#### 四 殺人光線及び病菌を如何に防禦すべき

毒瓦斯に對する防禦法は此の如く至難である、然るに將來起る戦争には人命に及ぼす危険は獨り毒瓦斯のみでない、夫の殺人光線と病菌とがある。此れは歐洲諸國で極秘に附して居るのかは知らないが、今日までの處は何處でもまだ発見したものが無いやうである。殺人光線の発見は現在の科學進歩の程度では望むべからざるやうであり、これを發明するには天才が創思の工夫を要するので



ある。然かしながら何時かか、る光線が發明されたとすれば今日では我々の想像にも及ばざる幾多の方面から戦闘の方法を變化せしめ、且戦争は今日よりも非常に猛烈残酷なものとなるは疑ひない。其中にも病菌に就ては既に歐洲諸國の試験所で實驗中である。其の方法としては何か世に稀な病を發見するのである。威らう事なら世界の片田舎で流行するものを選び出すが宜い。すれば敵國の人民も此の病氣に馴れぬところから直ぐに胃される。例へば米國のインヂヤン人の如き癩疹に胃され易い。彼等には天性癩疹に對する免疫性が無いからである。そこで先づ珍らしい不思議な病氣を探し出しその病菌を研究して大規模に効力ある立派な血清を製造する。微菌は至つて強壯なものに培養して流行蔓延の力を強くし、丁度近年流行したインフルエンザ菌のやうなものも造り出すことが出来ば妙である。之を引むるに當ては先づ自國の軍隊にその血清注射をする。さうした後を飛行機を以てしてか、或は間諜を放つてか、此の病毒に感染した昆蟲などを敵の軍隊内、或はその飲料水中に撒布する。之を撒布するには此外に色々巧妙な方法もあらう。左すれば數日ならざる内に敵はみな此の病氣に罹つて大に弱るから、これを征服することは容易となる。敵がこれを悟つて、此の病氣を直す特效藥や血清を發見すとしても、發見までには時日がかゝるから敵は既に己に大損害を受けて居るのである。

此れは決して一場の空想ではない。今日既に此の戦闘方法は歐洲諸國の化學者の講究に上つて居るのである。將來戦争起る場合には此の戦闘方法は獨り敵の軍隊に施さるゝのみならず、一般人民にも施さるゝものゝ覺悟せねばならぬ。こんな譯で此の次の戦争には色々不思議な事が起つて來るであらうが、差當り此の病菌戦闘は必ずこれあるに相違ない。丁度中古時代に流行した黒死病のやうな工合に、得體の分らぬ病氣が突然とはやり出し、老若男女の差別なく皆これに取附かれて一人免るゝ者ないといふやうな極めて恐ろしい光景を呈すること、先づ誰も豫期し居らねばなるまい。

## 五 人命の損害

以上新武器及び將來發明さるゝ武器より人命殊に非戦闘員に及ぼす効果の恐るべきを考察したが其の損害の程度は今固より精しく推測し得べき限りでないけれど、先般の歐洲戦争の損害にも幾層倍増して恐るべきものあるは疑ひない。

古來幾多の戦争で人命を失つたことの夥しきは先般の大戦争に及ぶものはない。丁妹の統計學協

會が調査編纂した統計に従へば、此の戦争に於て軍人の死傷は約一千万に上る、此外に不具となつて永久に活動する能はざる癱疾者が二三百萬あるといふ、前に記す如く、最近の戦争では兵士の殺傷はまだ小規模に行はれたのである。將來戦争起る場合には大規模に殺し合うであらうから、其の損害は中々そんな事では済むまい。

人命の損害はたゞ此ればかりでない、此外に一般人民即ち非戦闘員の損害を擧げねばならぬ。同じ統計に據れば此の非戦闘員の損害が三千萬ある、即ち此等の非戦闘員は戦争さへ無くれば今日まで生存し得る人達であるといふ。然かし此れとても先般の戦争では故意に殺す目的を以て殺したといふ場合は稀である。大抵は戦争の餘弊を受けて斃れたのである。此の三千の損害中には、戦争さへ起らなかつたら當然生れ來るべき人々、即ち出産の減少をも加へてある、然かし出産の減少に依る損害は眞の一小部分を占むるに過ぎない。直接に殺す目的を以て殺したといふはアルメニアの虐殺を始め、匈牙利人の塞爾維人を殺し、露國人の東部普魯西人を殺し、獨逸人の白耳義人を殺した等の事であるが、此れ亦アルメニア人の虐殺を除けば孰れも瑣細の人数である、此外間接に殺されたのは潜水艦戦及び空中攻撃の際に於けるものであるが、此れとても亦眞の一小部分である。其

の大部分を占むるものは戦争の餘弊に依るものであつて、即ち敵に封鎖されて糧道を狭められたる結果、營養不良に陥り困迫衰弱して斃れたのか、或は敵軍の侵入を避けて諸處漂泊し、食に飢え寒暑に苦み風雨に曝され、遂に堪へ得ずして死んだものである。以上人命の損害は殺戮の小規模に行はれたといふ中にも免れなだ處である。將來の戦争では戰場は勿論、敵の資力を絶滅する目的から毒瓦斯等を以て直接に非戦闘員を殺し、且嚴重に食料封鎖を行ふのであるから、其の死傷損害の夥しきことは總ての場合を通じ叙上の比に非らざるべきは深く言ふまでもない。

## 六 財物の損害

將來戦争の場合、其の財物に及ぼす損害に就いても略ぼ想像される。先般の歐洲戦争が家屋、田圃、工場、鑛山、橋梁、鐵道に與へた損害は既に人の知る所である。將來戦争起る場合、その財物に及ぼす損害如何は、偏に攻略に依ることには違ひないが、破壊の器具は既に具はつて居るのである。敵の抵抗力を一切破壊せんと欲すれば、單に大都會の人命を損傷し、人民の志氣を挫折するに止らず、其の有體物をも燒棄破壊するに務むるであらう。此の點から見るに飛行機數臺を都會の天

上に飛ばし、消火すべからざる燃焼爆薬を放下すれば忽ち大火を起さしめることが出来るのである。かゝる燃焼薬は將來必ず發明さるゝに相違なく、化學戦争の尙幼稚なる今日に在ても現存する所の火薬のみを以てして一朝に全市に火災を起させることは可能であるのである。現在歐洲の化學者は此の目的に向つて怪異な火薬の發明製造に没頭して居る。先般の戦争に例を取て佛國に就いて云ふに、巴里は作戰の中樞であり、鐵道の大中心であり、大製造市であれば、敵の首たる目標たるこゝは勿論、製造市たる里昂、サン・テチエンス、大港市たる馬耳塞、シエルプール、アーヴル、ボルドーを始め、其他大小とも軍需品の製造に従事する數百の小都市もみなその攻撃目標たるに相違ない。此等の大小都市が焼立てらるれば、人命の損害のみは毒瓦斯攻撃よりも鮮少なるにもせよ、財物の損傷は莫大である。例へば巴里が一朝數百箇所に一度に火災起り、猛火炎々として天を焦すとせば、猛焰忽ち四方に燃え擴がり、人民は逃げ惑ひて焼け死に死に生残りたるものは郊外に逃げのびて身を被うる物も喰ふ物もなく、飢寒にわめく中には巴里は全市燃え落ちて見る影なき焦土となるであらう。獨逸が攻撃され、伯林其他ライン沿岸の各大小都市が襲撃さるゝ場合も其の結果はこれと同様である。

之と同時に田圃の損害即ち農業財産の損害は、近の大戦争に見ざるほどの莫大な高に上るに違ひない。先般の戦争にも耕地の曠廢は古來の歴史に無い所であるが、將來の戦争には此れは決してそんな事では濟むまい。其れは毒瓦斯の使用より起るのである。毒瓦斯は單に細胞を殺すのみならず又細胞の發育を停止するもので、即ち動物のみならず、植物をも斃すのである。米國でリス毒瓦斯に次いで發明された別種の新毒瓦斯液に就いて某専門家はかう云つて居る、

此の毒瓦斯を發生する物質の微量を盛つた容器を樹木の根に置いて見よ。此の毒瓦斯は白煙を立てることは無い。全く無色透明なものである。然るに數分時をらざるに木々の葉は萎み始める。今確かにいふことは出來ぬが、此の毒瓦斯を被つた土地はざつと七年間は何物を發育する力を失ふ。將來の戦争は故意に敵の耕地を破壊せざるまでも人命を斃さんため、毒瓦斯が地面何百方哩の間に撒布さるゝ結果、防禦力なき動植物の命を絶つのみならず、『七年』の間土地を荒廢して不毛の地となすといふのである。即ち此の何百哩の間に在る農圃、田圃、菜園は一朝にして沙漠に化し、人間は七年間一物をも生産すること能はざるこゝこ、なるのである。人間の食物を産する第一の自然力は土地である、此の土地は七年間全く不毛の燒土となる。此の損害は建造物の破壊よりも比較にな

らぬほど至大である。

将来の戦争には土地を荒廢し食料の生産を絶たんとせば絶ち得るものが尙此外にある。それは矢張り病菌である。但し彼は人間に對する病菌であるが、此處にいふのは植物の病菌である。植物の黴菌は培養することも容易であり、又これを傳播させることも容易である。之を人知れず敵國の田圃に傳播すればその黴菌は草木を枯死せしめ、農産物を枯竭せしめる。一國人民を餓死せしめる此の戦闘方法も既に歐洲參謀本部の審議に上つて、技師は之が講究に従事して居る。

## 第五 戦争は容易に談ずべきで無い

(一)人命の損傷を如何に見るべきや—戦争は人間の優種を絶つ—非戦闘員の損失—戦死は純然たる損失—優長女子は殺さる—戦争の災を免るは劣者である、(二)物質上の損害、(三)世界を相手とするを要す—軍備で先づ倒れる—軍國の組織—獨逸は如何にして負けたか—實際問題、(四)國際聯盟の努力すべき所—強大國の責務

以上將來戦争の場合、人命殊に非戦闘員の生命および財物の上に及ぼす損害に就いてアーウィン

等の説くところである。我々は今此れに就いて大きに考へねばならぬ。

### 一 人命の損失を如何に見るべきや

戦争に於て最も悲惨痛惜すべきは人命の損傷である。人間が粒々辛苦して造り上げた建物を毀つのは誠に惜しむべきではあるが、其れはまた取返しもつく、たと人間の損傷ばかりはどうしても取返しつかぬ。如何に機械が完全しても如何に爲すべき仕事があつても、人間がなければ何一つ仕事は出来ぬ。殊に痛むべきは、戦闘の局面に立つて身命を抛ち、或は一生癡疾となる立派な將卒が一國の働き盛りの壯丁であり、身體智力に於て共に優秀なる分子である事である。謂れなく之を戰場に死なす國家は禍なるかな。

歐洲大戦争の人類に及ぼす結果如何に恐るべきものあるべきかは、開戦の初めより先見ある人士は憂慮した。英國の一記者は曰く試みに思へ、歐洲の青年將卒が何十萬といふもの、否、恐らく何百萬といふものが此の戦争で戦死するであらう。其中には文明の精華たるべき青年が交つて居て、此れが玉石俱に碎くるのである。今や我々は人間の最苦痛を慰藉して、社會の最大疾患を解決する

工夫を十年二十年と苦心研究して、吾人のためにこれを発見してくれたる優れたる頭脳を有する人間を此の戦争でムザ／＼と死なすのである。我々は我々のために前途の闇を照してくれる有爲の青年をムザ／＼と戦場の露と消えさせるのであると。

四年間の戦争は實に其の言ふ所の如くであつた。米國の生物學者エス・ケー・ハンフレー氏は天才的頭脳の所有者が空しく戦死した事の損失を計量して左の如く説いた。曰く、戦死した數百萬人中百萬人は特別優秀な遺傳を受けて生れ出でた人であらう。人間の將來は此等の優秀遺傳者の双肩に掛るものである。世間には残存者の生殖を奨励しさへすれば、二三代の内には此等の優秀遺傳者の死を償ふに足るやうな立派な人間が幾らでも生れて來ると思ふものも多けれども、此れは飛んでもない間違つた考へである。彼等優秀者は永久消滅するものであつて、劣弱な残存者は唯だ劣弱な同類を生殖するに過ぎないのであると。

アーウィンも生物學上より其の損失を考察して、此の損失は直接に當代に取て大損失であるのみならず、後代人類の蕃殖上に優良分子の血を絶つものと、デーヴィッド・スター・ジョーダン博士の著書「戦争と優種蕃殖」から引いて、現代戦争か徴兵制に依て行はるゝ結果、種族の素質を墮落せしむ

といふ次第を詳かに説明して居る。左にこれを引いて見やう。細かく之を論すれば異論もあるであらう、殊に我國は未だ歐洲ほど近代戦争の慘酷味を経験した事が無いから、何人も左程に感じないかも知れぬが、大體に於て戦争殊に新式戦争が一國の優良分子を失はしめるといふことは何人も異議なきことであらう。而うして、此の理は徴兵制度も義勇制度も同様である。

### 戦争は人間の優種を絶つ

「祖先の特徴は子孫に傳はり、強壯な男子は強壯な女子を生み、劣弱な女子は劣弱な子女を生む」とは生物學上の原則である。此の理は種馬の良種を得んとするものが其の種を擇ぶにても知れる。現代の戦争は徴兵制度と新式武器の威力に依て、かゝる恐しき結果を來し、優良なる男子の血屬を絶滅するに至るのである。

「普通、徴兵制度の行はるゝ國では男子二十歳になれば徴募されて軍籍に入り、二三年間、現役に服する。徴兵に對しては科學的に體格精神上の検査を行ひ、不具者、無能者又は低能者、胸隔狹窄なるもの、筋力の發達不完全なるもの、結核患者等、凡て國民の劣等者を剔ねてしまふ。此等の劣

等者は兵役の義務を免ぜられ家に在つて自由に自分の好む所の業に従事し、結婚したければ結婚する事も出来、子を生み父となり得るに反し、兵となるものは現役年限を務め上げなければ従職することも結婚することも出来ぬ。それ此等の青年は身體精神共に立派な一國の精華である、一廉の功を立つべき天才もある、然るに何等斟酌する所なく皆一律に取て兵卒とされる。此等が現役を務め上げて二十三歳となつて豫備役に入ると其間また年々一定の期間演習等に引出される。尤も其頃になれば一定の職業に就くことも結婚することも出来ないではない。二十六乃至二十八歳頃になつて豫備兵役に入り、三十歳三十二歳で後備兵に入り三十五歳で國民兵役に入り五十五歳頃になつて始めて兵役から免ぜられる。

「此れが一朝戦争となると、第一に銃を取て第一線に出で戦ふのは此の一國の精銳たる常備兵であつて、二十歳から二十五歳までの青年である。現代戦争が人類の素質を墮落さすといふ所以はこゝに在る。此等はまだ妻も子もない獨身者であるから、其の血統は戦死と共に絶滅する。次が中年の男子である。此等の中には現役を終つて後結婚したものもあるけれども、又結婚しないものもある、平均二人以上の子を挙げ居るかは疑問である。かくして後備兵と國民兵と順次繰出さるゝのであるが、戦死

の機會は次第に減じ、國民兵となると戦死の割合は極めて低く、而うして挙げ得るだけの子は舉げて居る。此間に於て徴兵検査に列ねられた人間の屑のみは悠々とその生涯を送り、妻を持ち子女を育て、行くのである。

「英米兩國では先般の大戦争に始めて徴兵法を採用するに當つて歐洲各國の制度に倣ひ満二十一歳から満三十歳までの男子を取り一般に結婚者を免除した。即ち壯丁を取る精神は同一であるが、結婚者を除いたのは別に考へがあつた、此れは成るだけ人間の悲痛と艱苦とを軽減せんと欲する趣意に出でたものであつて、二十歳の青年はまだ獨身であるから戦死してもそれを悲むものは唯だその近親のみであるが、三十五歳となれば妻子もあり、其の悲しみも思ひやらねばならず、且夫が兵卒として戦場に赴けば留守は妻子が自活の道を立てねばならぬといふ趣意から出たといふのである。」  
アーウィンは一寸これを評していふ、「英國や米國の結婚者を除いたといふは、慈悲人情に厚いやうなれど、實は人情に背く非科學的な考へである。科學上からいふならば、之れを逆さまにして、第一番に満七十歳乃至六十歳の老人を強制徴募して第一線に出し、六十歳乃至五十歳の男子を第二線に出し、五十歳乃至四十五歳の男子を國民兵役となす方が可い。人種上から云へば此等の老人は

生むだけの子女は生んで社會には用のないものである。自然は草木が種子を作つてしまへば跡はど  
うならうとも構ひつけぬ。戦争は已むを得ざるものとすれば、優種繁殖上も利益となるやう科學  
的に之を行ひ、未結婚の壯丁は後廻しとし、よほくの老人を先きに取るが正當の順序であらう。  
かく云へば言、滑稽に似たれども、本來戦争其物が理屈に合はぬ滑稽なものでないか」

彼は翻ていふ、「近代の初め、戦争が徴兵に依て行はれなだ間は人種上に左したる影響もなかつ  
たであらう。兵卒になるものは大抵は戦争の外には能の無い人間の屑であり、社會の厄介物であつ  
たのである。然かし其の中にも平生無事に苦む勇氣勃々たる青年もあり、萬一を僥倖し立身出世せ  
んとする相當野心あるものもあつたらう。又一方には英國の郷兵の如く、主従の關係から領主に従  
つて従軍する強健な農夫もあつたのであるから、一概に悪くもいへぬがまづ概して人間の位として  
は並みよりは抜いて居たといへば間違ひない所であらう。戦争が繁くなれば善いものを抜くやうに  
なるから國民全體の素質が下つて来る。古來世界に覇を稱した國民の興亡隆替は自ら一種の旋律を  
なすも自然の妙であつて、戦争を好む國民はその所謂極盛の點に達すると自らその活力を消耗し盡  
し、段々と衰微し始める。西班牙は第十七世紀の半はごろまでは歩兵の精強を以て鳴り、世界に雄

を稱したのであるが、第十九世紀に入ては徴々として振はず、歐洲各國からは愚弄されるやうにな  
つた。佛蘭西でも兵力を濫用した結果、拿破崙戦争後の青年は身長體量兩ながら衰へて、已むなく  
徴兵検査の標準を引下げたが其れでも尙不合格者の割合が頗ぶる多かつたと云はる。何れにもせ  
よ近年前の徴募法は今日の如く科學的に行はれたといふ譯では無いのであるから、其の人間の優種  
繁殖上に及ぼすところの作用は戦闘殺人の機械の進歩した今日の如く甚だしきに至らなかつたかと思はる。」

### 非戦闘員の損失

そこで歐洲戦争である。「歐洲大戰に於て非戦闘員の死傷した三千萬は多分種族上からいへば身體  
智力まづ標準點に在るものと見て宜からう。其中にも侵入軍の來襲を受けて狼狽逃避し、飢餓若く  
は疲憊のために死滅したものは恐らくは此の標準點以下のものであらう。此の如きは原始時代の生  
存競争に似た遣り方であつて、最弱者の倒れるのも優勝劣敗で致し方がない、自然淘汰にも叶う譯  
なのである。營養不良や戦争の餘毒たる傳染病のために斃れたものも矢張り平準以下の人々と見て

よからう。言冷刻に似たれど、以上の斃死は優種繁殖上から言へば寧ろ利益である。然かし出産者の減少に依る人口の損耗は左様いふ譯にはゆかぬ。此の減少は其の父たるべきものが戦場に在るか或は戦死した結果、生るべきものが生れざるに依るものであつて、夫の軍國中徴兵官に列ねられ悠悠家に在つて子を擧げるところの男子等とは反し、皆立派な子孫を遺すべき國民の精華であるから此の出産率の減少は人類に取ては損失である。然かし大體よりいへば非戦闘員の損益は略ぼ匹敵して、種族上には左して影響なきものと見て宜からう。』

### 戦死は純然たる損失

かの戦場に於て生命を失つた青年將卒一千万に至つては純然たる損失である。此の戦争で一番打撃を受けた國民は佛蘭西である。千九百十四年の人口三千九百七十萬人の内動員されたもの八百萬人、戦死戦傷と「行衛不明」に依て生命を失つたもの百八十萬人、而うして戦傷中八九十萬人は全く不具瘵疾となつた。其の損害は獨り此れのみで無い、其の戦死壯丁中には十九歳から二十歳までのものが約六割を占めて居たのである。此等名譽の戦死を遂げた青年將卒が一人に付き平均一人の子

女を遺して居るかは、まだ精確なる統計の之を徵すべきものがないから何ともいへぬけれども、先づ疑問である。獨逸の損傷は人口の割合からいへば寡少であつたけれど、人數としては一番多大であつて、その壯丁の戦死、戦傷、若くは行衛不明となつたものは合計二百萬人に及んだ。果して牛馬の種を改良するやうに人間を改良し得らるゝもとせば、佛獨兩國の戦死瘵疾百五十萬人若くは二百萬人は差當り第一に良種として選り取りらるべきものである。此の大戦争が現在歐洲人種の上に加何なる影響を與へるかは、今日に於て、未だ遽かに論斷するに由ないが、後世人口の生命統計出來て、千九百十八年から千九百三十八年に至る二十年間の統計と、千八百九十四年から千九百十四年に至る二十年間の統計とを比較講究し得るに至らば、我々は其の無情の數字より此の點を十分研究することが出来るであらう。』

### 優良女子は殺さる

アウインは更に女子に説き及ぼして曰く、「今日まで直接に戦闘の局に當つたものは一般に男子であつて、女子は此の義務を免れて居た。無論古來戦争ある毎に女子の殺さるゝ數も鮮からなんだ



のであるが、其れは全く戦争の飛ばつちりともいふべきであつて特に殺す目的を以て殺されたといふ譯ではなかつた。そこで戦争に疲れきつた國にも優良な女子は生き残つた男子と結婚して其の優良な血統を後世に傳へ國民の血を強壯にすることが出來た。然かし將來は左様いふ譯に往かなくなる。戦争は國民總動員を要するやうになつて先般の戦争には、軍需製造其他軍國の役務に取られ、而うして其の成績好く皆立派に其の機能を發揮して、當時女子なければ戦争を續行する能はずこまで云はれた。そこで休戦後歐洲諸國の參謀本部は女子の大に用ふるに足る事と、當年女子採用法の亂雑不規律にして費用にも冗費多大であつた事とを顧みて、寧ろ女子徴兵法を制定して、科學的に選擇を加へ、其の所長の作業に服せしむる方が遙かに効驗あり且經濟的であるといふ説が起つて爾後各國では其の徴募方法を調査しつつある。若し女子が男子に對すると同一の方針を以て徴集さる、こと、ならば、矢張り女子の優良強健なるものを採用し、且繁累少き未婚の年少女子を先にし、妻となり母となり居る女子に對しては、軍事上緊急の要求ある場合の外は後廻しとして、専ら子女養育の任務に當らしむるやうにするに違ひない。蓋し子女の養育は亦國家の大事であるからである。戦争中も大工場では女子に對して採用試験を行ひ、體格および智能を試験して取つた。今後女子も

男子と等しく徴兵法に依て徴集さる、場合には、男子と同様に、女子の中の屑は刎ねられて、さうして此の屑のみが戦時中も悠々と生き存へて、劣等な男子と結婚しその劣等な血を子孫に傳へることになるであらう。

『戦争中、英國で軍需品工場及び戦線後の輸送勤務に服して空中攻撃や砲撃の的になつて一命を失つた女子は何千とあつたが、然かし大體からいへば此れはまだく微々たる人数であつて優種の繁殖を妨げるまでには至らない。將來戦争ある場合には左様はゆかぬ。空中攻撃、毒瓦斯、病菌、殺人光線等が盛んに用ひらる、やうになつては、其の斃る、ものは歐洲戦争の比でなく、莫大な人数となるに違ひないから、其の人種上に及ぼす結果は思ひやるだに恐るべきである。』

### 戦争の益を受くるは劣者である

戦争に國民の優良分子が最先に犠牲となるは争ふべからざる所である。獨逸の有名な軍人フオン・デル・ゴルトツ元帥も『戦場には最も勇敢なるものが先頭に立ち、従つて先づ敵弾に斃る、からして、最も優良なる軍人が最も多く戦死するのは固より自然の事である。戦死者に最も優良といふ此の讀

辭を捧げることの拒むべからざると共に、國軍の素質が一戦毎に低下することは何人も否定する能はざるところである。」と證言して居る。

獨逸のニコライ博士は歐洲戦争の始めに於て其の「生物學より觀たる戦争」に説いて曰く、「人類の發展は頭腦の力であるが故に、智者の勝利は進歩を意味する、愚者の勝利は退歩を意味する。此の意味に於て暴力の跋扈、無智の跳梁は人類進歩の障碍である。古代の戦争は多少生物學上より見て好結果を齎した點もある。其れは交通の關係に於て古代の部落は互ひに孤立して居て、其の間に戦争が起れば身體の強壯なるもの、智能の優秀なるものが最後の勝利を占めて、負けた方のものは大抵みな殺され、女は強者なる仇の胤を宿した。古代にはかくして優者が生き残つて其の子孫が殖えたのである。

「然るに今日の戦争は全然これと趣きを異にする。現在獨逸國には三千三百萬の男子が居るが、其の半數は老幼、残りの半數は病弱者であつて、身體および精神の健全なものは僅かに残れる約八百萬人である。開戦の場合は此の健全なる國の寶が戰場に投げ出されて腐ちて行き、老幼および病弱者が國內に取殘されて子孫を遺すのである。平時に於ては右八百萬人の健全分子の中の幸運なるも

のは時を得て、要職を占め、子孫を増殖する。戰場では無事に生き残つて歸つて來たものも職を失ひ生活に苦み命を縮められる。戰場で勇敢智能ある青年が先づ斃れるのは艱難にして危険なる仕事は先づ彼等に振りあてられるからである。箇人箇人が渡り合つた昔の戦争では強いもの、能あるものが勝ち残つたのであるが、今日は砲彈や毒瓦斯は優劣を擇ばず、危険を冒して向ひ來るものを將棋倒しに倒してかゝる」(「國際聯盟」第一卷十一月號)

斯く將來戦争ある場合は女子も男子も同様に敵の攻撃の標的となるのみならず、國內のすべての強いもの弱いもの老ひたるもの、幼きもの、皆一樣に戦争の犠牲となるといふのである。然かれば夫れは嘗に優種の絶滅のみでない、すべての人類の根だやしである。

此に至れば國威國光も何の用をなすか。アールウインは斯う論斷して居る、「極端な軍國主義者は人間の最高本務は國威國光を發揚するに在る、此の外に人間何物も責ぶべきものは無いと云つて居るが、實に自ら誤り人を誤るものである。歴史に徴しても明白なる如く、武力を以て世界に覇を稱した西班牙も二代、三代にして衰微し始め、第十九世紀に入つては第十七世紀の面影を認むる由もない。生物學の教ふる所を以てするも、好戦國は宛かも己れを傷け人を傷くる兩刃の刀の如きもので

ある。戦争に依て國家の光榮を來すと思ふは實を忘れ影を逐ふものである。」

## 二 物質上の損害

將來戦争の場合に於ける財物の損害に就いては今また注意を呼ぶまでもあるまい。新武器の威力の絶大なるのみならず、戦争は今敵の資源を永久に絶つ目的を以て故意に財物を破壊するやうになつたのである。アーネスト・エル・ボガールト教授の推算に據ると歐洲の損失は直接戦費の外、財産の損失に依る間接の損害は三千二百億圓に上るといつて居るが、此れはまだ内輪な見積りであると教授も自ら云つて居る。即ち此等の外に、働き得る人の死滅、人間活動力の減少、經濟組織の破壊、其他間接損害を蒙つた諸方面の關係を細かに打算し來れば其の損害は何程に上るか、到底我等の力には及ばぬところであると云うのである。

此の戦争に於て人員に於けると等しく、物質に於て一番損害を蒙つたものは佛蘭西である。其の敵の侵入を蒙つた北部の地方一帯は佛國々民の命脈である。其の長千哩、幅五哩乃至十哩に亘る地域に在るすべての都邑、工場、運河、鐵道、道路、炭坑はみな破壊されて了つた。中にも炭坑（合計

二百二十區）は坑内に浸水され、ダイナマイトで爆破され、岩石を詰め、或は火を放つて全く燒棄されて了つて、之を戦前の状態に回復することは容易でなく、佛國人も今後十年間復舊は六箇しいと見て居る。其の他北部に盛んであつた工場五千（硫酸、製糖、製鐵、紡織）は或は全く破壊され、寡きも六分方は破壊され或は燒棄されて、その機械は皆解き崩して鐵材となし獨逸に送りつけて砲彈に製造されたのである。

又此間の耕地一百万町歩も全く曠廢に歸し、地面は一尺毎に砲彈のため大孔を開き、土地の沃土は皆砲彈のため吹飛され、砲彈の斷片は到る處に堆く地を掩うて居た。すべて北部一帯には都邑の數二千六百あつたのが、孰れも破壊され燒棄されて、人家一軒も殆ど満足に残るものは無かつた。人口も四百七十萬あつたのが、或は兵に取られ、或は地方に逃れて半分以下が僅かに戦場の辛艱を凌いで、踏み残つた居つたほどで、すべての生産力は殆ど皆無となつたのである。佛國政府は休戦後直ちに假住宅を建築し、復舊工事に着手して爾後今日に至るまで年々十四五億圓の金を投じて居る。此の金は獨逸から取る償金で國庫に拂戻す勘定になつて居るが、果して何時取れるのか、今尙悶著を極めて居る。

此等は實に恐るべきであるが、今後再び戦争起る場合には物質上の損害は決して此れ位の事では済むまい。空中攻撃は大都市をも一朝にして焦土となし得るのである、毒瓦斯は百里四方の土地をも一夕にして大沙漠と化し、七年の間一木一草を生ぜしめぬといふのである。昔し支那人は軍の過ぐる所その地を赤うすと云つたが、此の意味から見ても亦真である。

### 三 世界を相手とするを要す

新式戦争の慘害此の如く慄然として恐るべきものあるに於て、今日世界に平和の叫び盛んに起り何人も衷心から將來再び戦争なからしめんと願ふのは實に人情の自然である。然るに今日尙世界の國の中には戦争を夢みつゝあるものあるといふは果して何の心であるか。若し人あつて戦争を以て我が意思を他國に強制すべしと思ふものあらば、此の人は先づ世界を相手として戦ふの覚悟なくてはならない。其の國が一小國であり、其の相手とする國がまた一小國であらば或は戦争は世界の片隅の小競合位の事で済むかも知れぬけれど、苟も大國が大國に向て戦を挑むことになる一國と一國との戦争では済まぬ、必ず延いて歐洲戦争以上の世界戦争となるは疑ひない。それは今日の國際

關係は利害錯綜して一國獨り隔絶して孤立生存するを許さなくなつたからである。一國の存亡興廢は一國の興廢存亡で済まぬ、大小の中立國は直接にその影響を受くるのであるから、黙つて視て居ることが出来ない、必ず歐洲大戦争のやうに各々何れか其の一方に同盟聯合し一國の死力を盡して相戦ふやうになる。米國が歐洲大戦に参加したのも畢竟之れが爲めに外ならない。米國は今製造品の輸出國となつて、外國市場は米國に取つて國民繁榮の大要素となつたから、己れの利益を保護するの必要上、一國若くは數國の勝手に其の市場を處置することを許さなくなつたのである。此の事は現駐英米國大使ハーヴェー氏が昨年（大正十年）夏倫敦の公開席上に親しく演説したる所であつて、氏は淡泊に米國の参戦は専ら自ら救うためであると云つた（ハーヴェー氏は米國が参戦の理由を人道擁護の爲めとか、世界のデモクラシーの爲めとかいふは僞善であると斷言した）。或は其の攻撃者たる國が平生列國の猜疑疾視を受くるところの競争國であると見ると因果は觀面、列國は必ず何等かの理由を造つて戦争に参加する。或は表に立つて参加せざるまでも、相手の交戦國を支援して軍需品や資金をどしどし貸付けて後顧の憂へなからしむるやうにせぬとも限らぬのである。危いかな岌々乎たりとも云はねばならぬ、去りとして今日の世界の形勢では此れを以て誰を咎むる譯

にもゆかぬのである。兎にも角にも國際間の利害は網の如く益々紛糾錯綜して來たから、萬一にも相手の國が劣弱無力だからと見侮つて戦争を仕かけるやうなものなら取返しつかぬ飛んでもない間違ひをする。

又幸ひにして戦時中には列國の干渉を招かずとも、戦ひ勝つ後は横合から妨碍されるは極つて居る、戦勝の結果として敵の土地を略取せんとしても出来ることでない。況んや民族自決主義の盛んに唱道せられた今日である。其の國土を統治するは又戦争ほどの勞費を要する。他の理由は措いても、戦争殊に新式戦争は此の一點からも引合はぬものとなつた。

### 軍備で先づ倒れる

更に又考ふるに苟も戦ふ上は負けてはならぬ。然るに世界を相手として戦ふほどの準備あるものが何處の國に在るか。其處までは無くとも、所謂一國標準の主義を取つて準備するとしても、大抵の國は此の軍備のために先づ自ら倒れるであらう。

將來の戦争は機械の戦争であると云はれて居る。機械を動かすは固より人に待たねばならぬと雖

ども、此れが具はらずんば人力の衆多のみを恃みとする譯にゆかぬ。此の準備ばかりも容易でない。新式の科學的武器はその効力の増加したと共に、その製造費、維持費は益々鉅大となりつゝある。軍艦の工費は人の最も知るどころである。例へば戦艦の如きは其の艦型、武備の改良に應じて、その工費は一隻二千萬圓から八千萬圓、最近には一億圓近くなつた。陸軍はこれと趣きを異にして居るけれど、近年來飛行機、タンク、諸種の特種火砲等の出現、扱はまた人員等の増大等でその經費は一足飛に幾層倍の高になつた。今後の騎兵と呼べる、タンクは何處まで大きくなるか、どう又改良されるか分らぬ。陸上戦艦の別名ある如く、丁度水上軍艦が驅逐、巡洋艦、戦艦、弩級戦艦、超弩級戦艦となつたやうに順次大型の物が造り出さるゝであらう、水上タンクも今既に發明された。飛行機も諸種の火砲も左様である。軍人側にはせられたならば此外に色々注文あるべきは明白である。歩兵戦闘の如きも、歐洲大戰の末頃から戦闘方法が一變して、歩兵は攻防共に輕機關銃と重機關銃とで射撃戦闘を行ひ、小銃は突入の直前および突入後使用するに止るやうになつたと専門家は云つて居る。既に機械の戦争であれば、今後如何なる新改良、新發明が出て來て資金を要求するやうになるかも知れぬ。

歐洲戦争に於て聯合軍は萬事立後れ、新式武器の點に於てもずつと獨逸に負けて居たから、初め一年有半の間は陸上に水上に不覺を取つた。戦争の初期、駐英大使たりし米國のペーシ氏は當時英國が總ての準備に負けて居たことを云ひ、西部戦線の不首尾、獨逸潜水艦の跋扈、倫敦のツエベリン襲撃みな其の祟りであると云つた。

當時英國には實に何の準備なかつたのである。陸軍には只だ一門の重砲あつたのみである。飛行機も開戦した月の末（千九百十四年八月末）に佛國に送つた五六十臺が其の持つて居た總てであつた。其の海軍軍備も水上艦のみであつて、潜水艦には全く準備なかつた。ペーシ氏は斯う云つて居る、千九百十二年英國がホルデン卿を獨逸に派遣したとき、獨逸が英國と一戦せんとする意思を有して居たことは十分明白に看取された、けれども政府は人民が政府のいふ事を何か意味あつて宣傳的に吹聴するものと悪く取られんことを恐れて其の機密を公表することを憚つた、人民はたゞ金儲けとスポーツに耽けるのみであつたから、之を知らせても信じなかつたかも知れぬと云つて居る。

新式戦争の準備の費用絶大なるべきは歐洲大戦前に於ける三十四年間の準備の遠く及ぶところではないことは明白である。然かもこれを怠つては戦争が出来ぬ。將來の戦争は膨大の軍隊を養つて居て

も兵器其他の準備が之れに伴はなければ片輪である。アーウィンには歩兵の用不用を論ずるもの有りと云つて居る。新式戦闘方法は次第に人的價值を減じ、箇人の強弱勇怯は左のみ問題とならなくなつた。たゞひ我に百萬の精兵あり、軍紀嚴明、威容堂々として、歩兵は小銃の操法に熟し、密集群團して突貫するに勇み、騎兵は偵察に長じ、砲兵は射撃に巧みに、工兵は道路を築設し、塹壕を掘り、坑道を造るに妙を得たとした所で、新式兵器の前には力なく、劣勢の敵も飛行機、毒瓦斯彈、大爆彈等最新式の兵器を以て向ひはれて、竟に何程の働きをなし得るか。此時我にも之に對抗するに足る精巧の武器なくんば、我が精兵も如何に勇敢に、沈着に、巧妙に立廻りたりと敵から巨大なるタンクに乗掛けられたり、毒瓦斯を放たれたり、空中から高爆彈を亂投されては逆も前進し抵抗する段ではあるまい。歩兵の如き一處に密集すればするほど敵の好標物となるのである。總じて其他のすべての力が双方等しき場合には、新式武器を以て優勢を占むるものが制勝の可能性を有することは専門家の等しく説くところである。

大戦争勃發の四年前、英國の大蔵大臣（今の首相ロイド・ジョージ氏）は議會に演説して、歐洲列國が年々軍備費に四十五億圓を投じて居る、此れは何處の國でも長く堪へ得るどころであるまいと

云つたが、今後列國も均く此の軍備をなすこととしましたら世界の軍備費は果して幾何額に上るであらうか。

### 軍國の計

既に戦争を將來に期すれば、兵器其他の軍備費は各む譯にゆかぬ。そは自殺的な處置であるからである。更に一朝戦争となれば國家は生産の事業を廢して一意破壊の事業に従事せねばならぬ。即ち國內一切の生活機關殊に産業の資源を擧げて軍國の急需に應ずるやうに國民の生活組織を立て直して、以て外は莫大なる軍隊の軍需食糧を十分に供給し、内は人民に遺憾なく生活資料を供給し、國を擧げて安心して戦争遂行の任務に當り一點士氣を沮喪せざらしむることである。今日の戦争は戦局の廣大、人員の衆多と共に軍需を要すること無限である。歐洲戦争中、西部戦線に於ける一日の彈藥の消費量は前度の最大戦争即ち日露戦争全役の消費量よりも多かつたとは常に人の言ふところである。獨逸は初めより此を考量に加へ、動員と同日に生産運輸等一切の機關を擧げて軍國組織とした。聯合國は遅蒞きながらも之を悟つて國民生活の組織を組み直した。然かもその獨逸すらも

軍需の需要の鉅大此の如くなるに思ひ到らずして、初めの程は機械類の如き商品を片手間に製造して附近の中立國に賣附けて居て、戦局の重大なるに及んで始めて一切の機械工場を徵發して軍需工場に變造したのである。英國は初め二年間は平常通りに工場を行つて居たが、此れ亦急に目が覺め、慌て、略ほ國內一切の工場を軍需工場に變じて専ら兵器彈藥の製造に従事した。

アーウインは云つて居る、將來の戦争は宣告を待たず、何時破裂するかも分らぬと云はる、から左様な優長な事では戦争はできない。戦勝は偏に初次の果敢神速に依る、此の速戦速勝を誤れば戦争は長期戦となる。そこで『何時戦争が起つても、差支へなく倉庫には一切の軍需品が詰つて居り、タンク及び飛行機は完全に取揃へてあり、毒瓦斯管には何時でも持出せるやうに瓦斯が盛つてあり、そのみならず大小の工場は何時でも一令の下に軍需工場に變造し得るやうになしあり、男女の職工は配置命令を待たず、己れの所長に應ずる工場に就いて作業を開始し、豫備兵員は動員令と同時に所屬軍隊に加はり兵器を提げて戦場に走り得るやうに準備しあらねばならぬ。』

況んや戦争となれば直接にこれに要する経費も莫大である。聯合軍は歐洲戦争の終り頃には日々四億八千萬圓を投じて居た。苟も世界を相手として戦ふからは此の費用も己れの懐から出さねばな

らぬ。外國から睨まれては公債は望まれぬ。

### 獨逸は何故に負けたか

斯く戦はんと欲すれば平時に於ける兵器其他の必要な一切の準備が緊急である。此の必要な一切の準備は結局國力といふことに歸著する。たゞ此の國力である。將來の戦争は徒らに軍隊の衆多軍艦の壯麗のみでは出来ない。此れを之れ顧みず、軍隊軍艦の末をのみ頼んで外國の心理を度外視し速戦速決の利を夢むは、此れ國家の運命を賭せんとするもので、人の子を殺し、人間の活動の結果を破壊し、人民を損ひ國を滅亡に導くものである。兵を談ずものは何よりも此の國力即ち戦争を持續するの力に重きを置かねばなるまい。工業盛んならず、食料、原料、殊に武器の製造に必要な原料をも初めより外國に仰がざるを得ざる國に在つては誠に危いのである。獨逸が初め速戦速決の利を収めて結局負けたものは此の力に負けたのである。人力未だ全く枯渴を告げずして食糧盡き、兵糞彈藥の原料盡き、遂にその力を用ひ盡して補給するに由なく、士氣先づ沮喪して遂に敗れた。獨逸のみでない、聯合國に於ても露國は平生百萬の兵を養ひ、戦時千五百萬の兵を動かし、其の

外觀の勢威壯んなるものあつたけれど、國力足らず、天然の資源に豊かなるも工業なく、軍隊には彈藥盡き、人氏は飢ゑ凍ゑ、多年の政治上および社會上の破綻忽ち此の間に百出して遂に革命となつて亡びた。

### 實際問題

若し世界に國あつて國防の名に囚はれ、國力に應ぜざる過重の常備軍隊を養ひ巨額の國帑を費し、用兵上最根本たる國力の培養其他平時軍隊の裝備等必要の準備を怠り、好んで戦争を談ずるものあらば之を何とか評すべき。之を純然たる軍事上よりいはず、徒らに財力を糜して外觀の威容を張り戦争終局の勝利に益なからんよりは、世間多くの論者の力説するが如く、斷然思ひ切つて軍備を縮小し、其の節約したる經費を以て文化生産の事業に投じ、人民立國の精神を鞏固にし國力を培養し置き、一朝有るの日、一切の急需に應ずるに差支へなからしむるは寧ろ得策でないか。或は又軍人中にも説ある如く國防軍は常備兵數の多きよりも臨時編制の軍に重きを置き、同時に人力を機械化し、以て其の常備兵數を減少し、或は在役年限を短縮するが有効にして且經濟的ならざるか。凡て



此等は確かに實際問題である。國防は國民の國防なるに於て、一階級が自己の地位威容を張り自己の主張を専行すべきでない。

之を要するに戦争の實力なくして好んで戦を談じ兵を用ひんとするは國を誤るものである。況んや戦争の手段は殘刻兇暴にして且極悪である。戦ひ勝つても或者の望むが如く、國土を擴張し得る望みはない、たゞ多く人を殺して財を失ひ、破産同様の禍を招くのみである。之を思へば此の點のみからでも、將來再び世界的戦争の起る機會は一部の識者の豫言に反して減少するかも知れない。現在歐羅巴の大小列國戦後の解決に満足せず、戦ひ敗れたるものは復仇の念に満ち、戦ひ勝ちたる新興國は氣驕り或は志過大となつて極端なる國民主義に陥り、互ひに疾視反目して各々戦時中の軍備を弛ぶるを肯せざるは正に事實に相違なきところなれども、此の如きは大戰後舊秩序破れて新秩序未だ立たざる過去時代の一時的現象たるに止り、歲月立つ内には何時かその熱もさめて平靜に復し常態に立返るに相違なく、殊に大戰の慘害をしみじみ痛感しつゝ、ある各國民の最大多數は再び世界を舉つて戦争の渦中に捲込ましむることを峻拒するは疑ひない。

前敷章に叙述したる新式戦争の慘害は尤も牢記するを要する。國家の正當合理の目的は戦争に訴へずして之を達成する手段方法は今世に儼存して居るのである。我々の國際聯盟は即ちその國際的機關である。

#### 四 國際聯盟の努力すべき所

國際聯盟は博愛、平等、協力の原則に依り戦争を廢止して列國の共存共榮を大趣旨とする。聯盟規約は戦争に依らずして國際の紛議を解決する方法を示して居る。仲裁々判および勸解はそれである。聯盟は現代戦争の無意味にして、且無謀なる軍備競争は戦端を開く所以なるを知つて、戦争絶滅の第一歩として軍備縮少に向つて多大の努力を拂つて居る。聯盟は聯盟國をして戦争に訴へざるべきを相約せしめ、規約に違ひて開戦したる國に對しては經濟封鎖を行ひ或は國際聯盟の力を以て之を阻止せんことを宣明して居る。聯盟は又之に附帶して新式戦争に見る本編説くが如き國際公法の無視、毒瓦斯等の非人道的使用にも注意を加へて居る。國際聯盟の大趣旨にして行はれるならば世界に戦争を絶つことも出来る。たゞ聯盟が未だ具體的成果を挙げないのは遺憾とするところであるが、然かも此れは機關の不備不足ではなくして、之を活用すべき我々の努力の未だ足らざるが故

である。

此時に當つて華盛頓會議が海軍軍備制限に手を下し、世界大國の海軍武器の使用を制限し、太平洋及び極東の防備及び政策に就いて協定を遂げ、併せて國際法、交戦法規にも注意を加へ、毒瓦斯を禁制し、潜水艦を無法非人道的に使用せざるべきを相約束した。此れは國際聯盟の使命の一端を具體化したるものであつて、世界の平和および人道に向つての一大進歩として誠に歓迎すべき所である。

永遠の平和、戦争絶滅、軍備縮少、國際協同は今世界の人間愛を主張するもの、衷心からの叫びとなつて居る。一方に暗黒混亂の陰影を見る中に、此の光明の益々顯赫なるものあるを認むるのは誠に悦ぶべき現象であつて、國際聯盟の益々努力すべき所である。我々は敢て悲觀説をなすものには無いが、世界にはまた消すべからざる一種の不安あることも否むことが出来ぬ。戦後民族自決主義は固陋なる國家至上主義に變ぜんとしつつあるかの一部の傾向に對しては斷じて同情を表すことが出来ぬけれども、其の不安中にはまた自ら幾分の理由あることも認めねばならぬ。古來戦争の原因たるものは性質一ならぬけれども、近代に於て其の主たるものは生存の條件、經濟上の事情に

發するものである、之を平たく云へば、世界の人民が樂に食うて生きてゆきたいと云ふことである。歐洲戦争の眞原因も畢竟ここに在る。獨逸は列國のために此の條件を阻遏せられたりと誤り信じたのである。今日多少とも文明に浴する國は狂人に非ざる限りは所謂兩刃の刀を揮り廻し、自ら傷け人を傷けんとするものなきは理に於て明白であるが、然かも國民が他國のために生存條件を沒義道に阻遏されたりと感じ、且實際にそれを深刻に經驗するに至らば、背に腹は替えられず、自ら救はんと欲するの餘、或は自暴自棄の餘、成算なしと知りつゝ、も兇暴なる戦闘殺戮の手段に出でぬとも、其の人間である限り、絶無を保し得られぬのである。世界の他の國民が此の如き不幸なる國民に同情を表し、國際聯盟の唱道する博愛正義、共存共榮の通義を旨として之に對すれば、此の不安の大部分、随つて又戦争を誘引するの一大禍根は自然に消滅する譯である。

### 強大國の責務

此の大不安を除くは殊に大國の心掛け一つである。凡て強大國が國際間の正義を重んじ、平等、博愛、協調の精神を守りて、自己の天然の惠福を壟斷して障壁を構へ、他國の均霑を許さずといふ

が如きこと無く、又その所謂正義も、世界平和策も、總ての協約も自己の利益便宜を本位として鹽梅すると云ふか如きことなく、すべて弱小國と共に此の世界に樂に住んで樂に食うて樂に生きてゆく人類普通の情念を失はざるに於ては歐洲の識者先覺が現在列國對峙の眞状態に見て、『平和の基礎の薄弱』なるを感じ、『第二の世界戦争』あるべきをも深憂することも畢竟杞憂に屬すること、なるであらうと思ふ。

事此に出れば華盛頓會議のもろくの協定の如きも善い意味から云つて一片の反古なる。西歐の論者が指摘したやうに、華盛頓會議が主として武器の制限を規約するに止つて、戦争の原因の根本に觸れて居ないと論ずる非難も無用となる。すべて證文は無用となり反古となり、物を云はせぬやうにするのが本旨であるべきである。此の協約に加盟する強大國が國際聯盟の大義を以てすべての國に接すれば此れのみで以て殆ど戦争を絶滅させる事が出来る、小弱者は何ともいへばいへ好んで現代戦争を交ふるほどの力は無いのである。此の點に於て我國も締盟列國の一として強大なる責務を有することを自ら知らねばならぬ。國際聯盟が何よりも大國の間に周旋して、之をして此等の理を徹頭徹底的に感得せしむる媒介となることが出来るならば、其の功はまた戦争防止、紛議協定の建

設的成功に譲らないこと、思はれる。國際聯盟の眞精神を確信する志士仁人は併せて此に力を致さんことを切に祈る、現在の處世界平和の眞の基礎は主として此に在る、普通人間の慾は大きいやうでも小さい。人間の最大多數は軍人と否とを問はず、決して戦ひを好み、同類相殺し相屠るを快むるものではないのである。此の理は古今東西の別なしと我々は確信する。

## 次の戦争 (終)

大正十一年九月十日印刷  
大正十一年九月十一日發行

定價金壹圓

不許  
複製

編輯  
行轉  
兼管

印刷  
者

印刷  
所

東京市麴町區內山下町一ノ一

稻垣守克

東京市小石川區若葉谷町三七

久保民生

東京市小石川區若葉谷町三七

相互印刷株式會社

東京市麴町區內山下町一ノ一

國際聯盟協會

電話東京五五三三八 電報號碼三五三三

發行所

誌 國 際 聯 盟  
國 際 智 識 每月發行

本誌は外務省、大藏省其他に於て最も活動しつゝある少壯學者が毎日得つゝある確實なる豊富なる國際の報道其他實際的研究家の研究と報道とを親切に明瞭に發表せる本邦唯一の權威ある國際智識涵養の雜誌。新聞の報道は簡に過ぎて部分的である。最近の世界の大勢を知らんとするものゝ爲めの好資料。

**果して強國は醒めたりや**

定價二圓五十錢

外務省參事官杉村陽太郎氏の實際的國際關係を背景として説ける人類愛的主張。ワシントン會議より歸朝したる氏が最初に發表せる快著である。

**最近時代思潮論集**

大正十一年夏季大學（本協會主催、鎌倉）に於ける講演集である。定價貳圓五十錢

阪谷、添田、穂積、泉、米田、各法學博士、姉崎、得能各文學博士石原純理學博士、小泉、大山、杉森各教授、其他杉村陽太郎氏、青木得三氏、野口援太郎氏等。其内容の充實！

**國際論も人情から**

定價五十錢

本會理事、衆議院議員田川大吉郎氏著、國際精神を親切に容易に説明せるもの。

218  
492

終

